



これからの建築家を考える 歴史的建造物のリノベーションを通して

支部長挨拶

常任幹事会からの報告

第35回 JIA 神奈川建築WEEK かながわ建築祭2024

覗いてみました他人の流儀

卒業設計をふりかえる

わたしの師

海外レポート

溶けた石—鉄筋コンクリート建築の考古学—第2回

Meaningful Garden—意味に満ちた庭—第6回

弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第9回

温故知新

活動報告

学生の会 @joint 活動報告

Bulletin



持続可能な社会を目指して 環境に優しい石膏ボードをつくる

チヨダウーテ株式会社は、1948(昭和23)年に厚形スレートを製造する会社として三重県四日市市で創業。その後石膏ボードの製造を始め、現在5工場体制で全国に石膏ボードを供給しています。2022年には、世界屈指の総合建材メーカーであるドイツのクナウフ(Knauf)グループに所属し、時代に合わせた製品開発と、石膏ボードの日本市場でのさらなる発展を目指しています。近年は地球環境問題など社会的課題に向き合い、CO₂排出量削減と廃材を利用したりリサイクル製品づくりを積極的に進めています。

廃石膏ボードのリサイクル

石膏ボードは日本では1921年に初めて製造され、防火性、遮音性、断熱性に優れ、寸法が安定しており施工もしやすいことから、建物の壁や天井に広く使われています。当社は1955年から石膏ボードの製造販売を開始し、さまざまな製品を開発してきました。

近年重点的に取り組んでいるのが廃石膏ボードのリサイクルです。戦後に建てられた建物の多くが寿命を迎えるにあたり、解体現場での石膏ボードの廃棄量は年々増加し、現在年間約150万トンの廃棄量が、20年後には300万トンになると言われています。埋立処分場の残余容量がひっ迫することは明らかです。その受け皿として廃石膏の原料化が課題となっていました。

当社は約10年前に(株)トクヤマと共同で(株)トクヤマ・チヨダジプサムを設立。独自の技術を用いて石膏ボードのリサイクル事業を展開しています。

100%廃石膏からつくられた 「サーキュラーせっこうボード」

昨年6月、世界初の100%リサイクル石膏を原料とした「チヨダサーキュラーせっこうボード」を発売し、ついにボードtoボードを実現しました。

製造時の熱源にはバイオマスボイラーを利用し、製造工場では再生可能エネルギー由来のグリーン電力を採用。その結果、CO₂排出量を大幅に削減し、石膏ボード製造時は実質ゼロカーボンを実現しました。見た目は変わりま



「サーキュラーせっこうボード」の採用事例、(株)東急Re・デザイン様「用賀オフィス改修プロジェクト」

せんが、当社の「せっこうボード」は原材料と製造時のCO₂排出量削減の両面から環境に配慮した材料となっています。

「サーキュラーせっこうボード」の発売当初の販売価格は1,325円/㎡でしたが、量産体制が整い、今年5月には1,100円/㎡に見直しました。最近では非住宅物件での採用事例も増えてきています。

また、当社と森ビル(株)、内装を手掛ける(株)船場、(株)トクヤマ・チヨダジプサムで連携し、廃石膏ボードの活用の共同実験も行っており、「サーキュラーせっこうボード」を使ったりサイクルのスキーム構築も進めています。

これらをきっかけに、100%リサイクルの価値が広がることを期待しています。

機能性石膏ボードも多数用意

さまざまな機能を付加した石膏ボードも多数用意しています。

「さわやかせっこうボード」は珪藻土を含み調湿効果があり、高断熱住宅での結露を防ぎます。「スキュータムボード」は鉛を使用せずにX線を遮蔽。医療施設で採用されています。「耐力ボード」は耐力壁としても使用でき、木質材料の代わりに選んでいただく例も増えています。その他、グラスウール断熱材や曲面施工が可能なセメントボードなども取り扱っています。

当社では会社と社員の結びつきを大事に考えて、社員がやりがいを持って働けるように社員同士がコミュニケーションを取る時間を大切にしています。これからも課題と向き合い、ビジョンの実現に向けてチャレンジしていきます。



チヨダウーテ

www.chiyoda-ute.co.jp

石膏ボードの製造販売を中心に、その他建材の開発・製造・販売を行う。

本社事務所 三重県三重郡川越町高松928番地 TEL:059-363-5555(代) FAX:059-363-5553
東京支店 東京都台東区寿3丁目14番11号 蔵前チヨダビル6階 TEL:03-6635-1650 FAX:03-5828-2860
全国に製造拠点は5ヵ所(室蘭、千葉、四日市、貝塚、下関)、営業拠点は15ヵ所ある。

目次

- 4 支部長挨拶 2024年度の主な課題と取り組み 大字根建築設計事務所 渡邊太海
5 常任幹事会からの報告 支部総会・会員集会を終えて 梓設計 安川 智

●特集

6 これからの建築家を考える 歴史的建造物のリノベーションを通して

- 6 動き続ける関係をつくる MARU. architecture 高野洋平
8 時を越え想いを繋ぐ復原設計 波多野純建築設計室/日本工業大学名誉教授 波多野 純
10 Website「建築リノベーションアーカイブ.com」から見えてくるもの 桐原武志
やなぎざわ建築設計室 柳沢伸也

●ひろば

- 12 支部活動紹介 第35回JIA神奈川建築WEEK かながわ建築祭2024
コンテンツポラリーズ 柳澤 潤/Field Design Architects 井上雅宏/アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所 田井幹夫/
伊藤立平建築設計事務所 伊藤立平/八板建築設計事務所 八板晋太郎/アトリエ秀 高橋隆博/仲亀清進建築事務所 仲亀清進
- 16 覗いてみました他人の流儀 中原崇志氏に聞く 情報を読み解きかたちにする Bulletin編集WG
- 18 卒業設計をふりかえる 立ち位置を探して 廣部剛司建築研究所 廣部剛司
- 19 わたしの師 晩成に向け歩を進めて K+Sアーキテツ 鹿嶋信哉
- 20 海外レポート 地球の71.132419045%の海の上に浮かぶ移動する建築 KOTARO HORIUCHI 堀内功太郎
- 22 溶けた石—鉄筋コンクリート建築の考古学— 第2回 石と鉄が出会うとき 後藤武建築設計事務所 後藤 武
- 24 Meaningful Garden～意味に満ちた庭～ 第6回 御代田の月の神 アイダアトリエ 会田友朗
- 25 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第9回 設計上の瑕疵について 榎本・藤本・安藤総合法律事務所 安藤 亮
- 26 温故知新 先達に学ぶ 修業時代のこと アーキヴィジョン広谷スタジオ 広谷純弘
- 27 抱負を語る 何者でもなく 日建設計 青柳 創
抱負を語る JIA mean to you 伊藤友紀建築研究所 伊藤友紀
- 28 活動報告 交流委員会 Bグループ 交流イベントを積極的に企画 日新工業 西谷大介
- 29 交流委員会 Cグループ 建物見学会 日本製鉄 知見徹摩
- 30 学生の会 @joint 活動報告 第3回まち歩き「東京サイハッケン」を開催！ 東京電機大学大学院 林 萌絵
次世代のタマゴたち 人の「心理量」を設計に活かす 早稲田大学 辻本雄一郎

●あとがき

- 31 支部総務委員会からのお知らせ/編集後記
- 2 パートナーズアイ チョダウーテ株式会社 持続可能な社会を目指して環境に優しい石膏ボードをつくる

表紙写真：左 「花重」 設計 MARU. architecture
中 神奈川地域会「かながわ建築祭」、横浜市役所アトリウムでの展示風景（写真：TERAKAWA写真事務所）
右 東京ジャーミー・トルコ文化センターの礼拝堂

2024年度の主な課題と取り組み



関東甲信越支部長
渡邊 太海

関東甲信越支部長として2期目を迎えます。ここ2年の課題を少しでも前進できるよう、執行部とともに支部運営に邁進します。本年度の活動計画は総会資料等で示していますので、直近の主な課題についてお話しします。

持続可能なJIAになるために

公益社団法人移行から10年間で全国のJIA正会員は約1,000人(25%)減少しました。関東甲信越支部は正会員の約7割が60歳以上です。地域会の中には、代表や会計の選任ができず、活動が止まっているところも出てきています。やむなく何年も同じメンバーで活動を行い、活動がマンネリ化・サロン化し若手が入りにくいという声も聞きます。東京都内の地域会に属する会員は減り、最初から地域会に入っていない会員も多数います。少ない人数の中で全国大会などの担当になると何ヵ月も仕事ができない、全国の支部からも悲鳴が聞こえてきています。

公益社団法人化から10年経過し、これまでと同じ活動をするのに正会員数や予算は足りているのだろうか？ 規定に縛られ、正会員しかできない役務を見直すべきではないか？ 持続可能な活動のための仕組みはどうしたらよいのか？ 皆さんの声を聞くアンケート等を実施し、実態を把握し、今後の方針を考えていきたいと思います。

JIA 建築家大会 2025 千葉にむけて

JIAの定款第3条に、JIAの目的は「建築家の職業理念に基づいた基準を遵守し、建築家の資質の向上と業務の進歩改善をはかることにより、建築・地域・環境の保全と創造及び建築文化の発展に貢献し、公益に寄与する。」と書かれています。

JIAは公益のための取り組みを毎年さまざまな形で行っていますが、一般の人にどこまで伝わっているのでしょうか？ そして一般の人が助けてほしいということに対して私たちはどこまで耳を傾けているのでしょうか？ 市民の声を聞くにはもっと地域に根差した活動ができるような体制が必要ではないのでしょうか？

諸先輩からJIAに入会した時、これで一人前の建築家になれたと感動したとの話も聞きます。今はどうでしょうか？ 若い人がJIAに入会する動機は？ 建築家と名乗ることに抵抗はないのか？ 一般の人からどのように見

られているのでしょうか？ 登録建築家、統括一級建築士、APECアーキテクト、一級建築士 さまざまな違いを一般の人は知っているのでしょうか？

来年の全国大会千葉では、公益社団法人のJIAが取り組んでいる活動がどのように社会貢献しているか、建築家と市民が協働することにより良質な社会が実現していることを伝えたいと思います。

そして「建築家」がどのような職業で、どんな志を持っているのか、どのような経験、実績、資格を持ち、どのように継続的な勉強をしているのか、わかりやすく社会に伝え「建築家」の職能の確立を一層進めたいと思います。

建築家資格制度の今後について

JIAの定款第6条に正会員は「職業理念に基づいた建築家憲章、倫理規定、行動規範を遵守し、専ら建築設計業務を行い、一級建築士の免許登録後5年以上設計監理業務を行った〈建築家〉とする。ただし、本会入会后5年以上を経過した正会員2名以上の推薦を得なければならない。」とあります。また、「建築家憲章」には、「JIA正会員は建築家憲章のもとに集う〈建築家〉です。」とあります。

これらを読むと一般的に使われている〈建築家〉のなかで上記の条件を満たした人がJIAの正会員ということなので、JIA正会員以外にも〈建築家〉は存在し、この〈建築家〉はどんな人なのか知りたくなります。

日本建築家協会が掲げている「建築家」と一般的に使われている〈建築家〉はどこが違う、〈建築家〉の定義は何か？ このことが建築家の資格や職能を語るうえで重要だと思います。本年度から新しい資格制度を推進する特別委員会が本部で立ち上がりました。JIA内部だけでなく外部団体の声を聞きながら進めていきます。途中経過の報告や意見交換の場を設け、支部内での議論が活発になるよう努めます。

ぜひJIAの活動に参加を

皆さまの協力なしでは支部は成り立ちません。JIAに入っただけでは何も得るものではありません。ぜひ活動に参加しましょう。また時々「JIA定款」「建築家憲章」「倫理規定」「行動規範」を読み返し、JIAの目的やJIAが掲げる建築家について一緒に考えていきましょう。

支部総会・会員集会を終えて



関東甲信越支部
理事・副支部長
安川 智

2023年秋号から全4回にわたり、支部活動を会員の方に伝える「活動報告」を担当した。また同時に「新資格制度」について、議論の場を広げ、理解を深めていただくために「建築家資格制度を考える」を寄稿した。

6月26日の本部理事会において2期目を迎えた佐藤尚巳会長のもと、新体制がスタートした。JIAの重要施策のひとつとして「新資格制度を推進する特別委員会」が発足し、私自身も委員の一員として末席に連なる機会を得た。「新資格制度」の議論が新たなステージに移行することを期待し、ここに報告する。

5/29「総会・会員集会」

建築家会館本館1階ホールにて支部総会が行われ、総会定足数の確認後、各議案および報告事項が承認された。

総会後の会員集会のテーマは「JIA全国大会を考える～2025千葉大会に向けて」。今年11月の2024別府大会に続いて、2025年は関東甲信越支部が千葉地域会や実行委員会の協力を得て、千葉での開催を予定している。実行委員会を代表して水越英一郎氏が、近年の全国大会の現状と課題を分析、見直しのポイント（①開催意義の再確認、②開催費用や協賛金の見直し、③開催日程と企画の見直し）について説明。慣例的な大会ではなく、持続可能な大会運営をモットーに、会員だけではなく一般の方や学生にも参加を呼びかけ、広く社会への発信する大会としてさまざまなプログラムを検討中であることが伝えられ、大会実現に向けた有意義な議論の場となった。

6/28「新資格制度を推進する特別委員会（第1回）」

「新資格制度を推進する特別委員会」は、慶野正司氏（前副会長・前支部長）を委員長に、各支部長、職能・資格制度委員会、他団体からは建築士会、日事連の各副会長が名を連ねる。過去に幾度も議論が繰り返されたが、新たな資格制度実現に至らなかった経緯を理解しつつ、新たな一歩がスタートしたことを実感している。

関連トピック「建築基本法（試案）」について

「建築基本法」という言葉をご存知だろうか？ ChatGPTの力を借りて調べてみると、建築基本法制定準備会（会長 神田順/東京大学名誉教授）なる団体があり、大学関係者や建築実務者等の有志により建築基本法の制定を目

指し、2003年8月に任意団体として発足、現在に至るまでさまざまな活動を行っている。

建築基準法と建築基本法（試案）の比較において、建築基準法は、「建物の安全性や衛生面などの最低限の基準を具体的に定めた法律であり、個別の建物やプロジェクトに直接適用される」のに対し、建築基本法（試案）は、「社会における建築のあるべき姿、実現されるべき価値を明らかにした上で、関係者の責務（果たすべき責任と務め）を明確化し、その社会的価値を実現する上で、役割分担の合意および建築にかかわる法体系の整備を前提とする」と書かれている。2011年2月の『日経アーキテクチャ』に特集記事が掲載されているが、現状法制化されていない理由や背景は確認することができなかった。

一方、先日6月8日に開催された建築基本法制定準備会2024年度総会の議事録（公開）によると、今期活動計画において「JIAなど建築関係諸団体と連携した議員連盟の支援内容について検討する」との記載がある。新資格制度を推進する上で他団体連携は重要であり、社会の期待に応え質の高い建築を実現する共通の目的に向けて、相互に意見交換ができることを期待したい。

おわりに

「資格制度はJIAの永遠のテーマだから……」。会員との冗談混じりの会話で耳にすることがある。会員の中にもさまざまな意見があり、JIA単独で解決できる話でもなく、業界団体との議論や見解の統一も必要である。また当然ながら社会のニーズがない限り、議論は水の泡となるであろう。「永遠」とは時間を超越して変わらないことである。「新資格制度」の実現に向けて、JIAに求められているのは「永遠」ではなく「変化」だと感じている。



「特集 建築基本法、始動」『日経アーキテクチャ』2011年2月25日号

歴史的建造物のリノベーションを通して

動き続ける関係をつくる



MARU. architecture
高野洋平

すでにあるものの関係を更新し、動的な状態をつくる

全ての建築はさまざまな関係性の中にあるということ、最近あらためて考える。どこまでが全体で、どこまでがその一部なのか。例えば、新築の設計の場合、敷地境界線を意識することが多い。一方で、それは便宜的な境目であり、実際は一繋がり^①の街区であり、まちの一部である。何もない更地につくるように思っても、そこには隣り合う建物や道があり、常に何かと関係し合っている。

既存の建物がすでにある場合がリノベーションということになる。その場合、読み込むべき対象がはっきりしていることから、否が応でも関係性に対する解像度が高くなるが、扱おうとすることは大きくは変わらない。新築／リノベーションという枠組みは、関係性をつくるという点において、連続的な関係にあるはずだ。新旧は二元的な関係ではなく、多元的であり、変化し続けるものだと捉え、その一断面を設計しているのではないか。最近はそのように考えるようになった。

では、本稿のテーマであるリノベーションとは何を設計対象にしているのか。それは、すでにあるものの関係性を更新することであるように思う。生物学者の福岡伸一さんが言う動的平衡は、「生命は代謝しつづけることによって持続する」という概念だが、建築においても、動的な関係性がある状態が重要なのである。

私たちが事務所を構える、東京都台東区上野桜木／谷中エリアは、震災を逃れて歴史的資源が今も多く残っている。それらをただ保存して残していくということではなく、動的な関係性を生み出していくことを目指している。具体的なプロジェクトを通じて考えてみたい。

花重／架構の律と変化し続けるもの

150年続く老舗の花屋「花重」の改修である。私たちが最初に訪れた時、明治期につくられた登録有形文化財の店舗以外は、使われなくなった建物で埋め尽くされていた。長い時間の中で堆積された物やさまざまな痕跡がひ



台東区谷中にある老舗の花屋「花重」

しめぎ合い、飽和した状態に感じられた。

私たちが問題にしたことは、何を残し、何が変わるのかということである。NPOたいとう都市歴史研究会による調査の結果、4棟（江戸長屋、明治棟、つなぎ棟、戦前棟）は歴史を引き継ぐ上で重要な建物であるという位置づけがなされた。それ以外の建物を解体することで、敷地の中に空地が生まれた。4棟の建物は、時代ごとの架構形式を備え、架構に刻まれた痕跡からは建物の履歴を感じることができる。私たちは、痕跡の残る架構を「永く残るもの」、その他の仕上げを「変化し続けるもの」と位置づけ、これを基本構成とした。

また、敷地の中に生まれた空地には、既存架構を手掛かりに、新設の鉄骨フレームを延長した。新設鉄骨の仕口は、既存木造架構が当時の技術の粋を集めてつくられたように、現代的な技術でこそ実現できる無垢鉄の切削仕口による嵌め込み形式とした。それぞれの既存木造建物が時代ごとの技術の粋を集めた仕口によってできていることと同様に、新設鉄骨の仕口も現代的な技術でしか実現できないものとするのを考えた。柱・梁をシンプルに組み合わせる構成は、機械加工による許容誤差0.01mmの精緻なディテールによって実現されている。建物は設計者より長く存在する。その意図は、人ではなく物を媒介して後世に残っていくものである。でき



新設鉄骨の仕口



左：戦前棟より庭を見る
右：新設鉄骨フレームによるテラス

てしまえば見えない仕口だが、物の成り立ちを未来に伝える役割を担うであろうと考えた。

鉄骨フレームは60mmの無垢材でできている。これは、既存木造柱の105mm、120mmといった寸法体系とは別の自律性を備えている。無垢材の鉄は時間の中で徐々に錆びていく。木が時間の痕跡を残すのと同様に鉄も時間の痕跡を残していく。

花重の建築は、このような時代ごとの架構のアンサンブルでできている。それぞれの架構は自律的でありながら、関係し合っている。架構は、いわば音楽の楽譜のような律を全体に敷いている。その隙間には、さまざまなものが入り込んでくる余地がある。

時代ごとの建物を横断するように、さまざまなエレメントを重ねた。家具や置床、植物、布は、架構の隙間で自由に振る舞うものと位置づけた。寸法体系を持った架構の律を骨格として、変化しつづけるものとしての振る舞いが生まれる。

これらの横断的エレメントは、今回の改修によって設計されたものでもあり、その後に加わっていくものでもある。改修が終わってから1年の時が過ぎた今、その変化を少しずつ感じている。鉄の錆色は少しずつ赤みを帯び、緑とのコントラストが美しい。家具に生けられた花や鉄骨フレームと絡んだ庭の植物は、通りから内部、庭への横断的な繋がりを生み出している。新しく設えられた家具は、そこそこに人が過ごす場をつくっている。改修後は、どこかまだ緊張していた関係が、やわらかい関係を持ちつつある。

桃林堂／心の情景が繋がりがりながら変化していくこと

花重の改修が終わった頃、思いがけず事務所から徒歩3分の老舗和菓子屋「桃林堂」^{とうりんどう}の改修の依頼をいただいた。数十年の歴史を持つ桃林堂は、増改築を重ねながら今に至る。原型となる建物は、母屋とゆったりとした前庭を持っていた。その後、店舗を営むにあたって、必要なスペースが足されたり、間取りが変化し続けてきた。

興味深いのは、このような数々の変化が加えられてきたにもかかわらず、桃林堂は、多くの人にとって変わらない印象を持ち続けていることである。

では、桃林堂らしさとは何か、と考えた。それは、人それぞれの心の中にある風景のようなものではないか。それは、ある人にとっては建物の佇まいであり、ある人にとっては内装の印象であり、ある人にとってはお店の雰囲気であるかもしれない。私たちはそれらを、かたちではなく、言葉で記述することから始めた。言葉は、心の中の情景を含んだものとして記述される。それは人それぞれ違うものだが、どこか重なり合う部分がある。その重なりが変わらない印象を生み出す。

私たちが手掛けた改修設計は、変わらない印象を維持しつつ、空間や物の関係を少しずつ整えていくような行為であった。それは表れとしては前景化されない。しかし、まちとの繋がりや、光の入り方、人の居方、といったことが明らかに変わったことは、皆が感じていることなのである。



改修設計を行った和菓子屋「桃林堂」

関係性の中にある建築

2つのプロジェクトは、建築の表れ方は異なるものの、新旧を二元的な関係ではなく、連続的な時間軸で捉えるということにおいて、共通して考えることが多い。

モダニズムが目指したことは、当時の時代的閉塞感を打ち破り、新しい自由を獲得することであった。そして人々に受け入れられ世界中に広がった。それは、現実と切り離されたある種のユートピアのような世界として受け止められたかもしれない。私たちはそのイデア的な世界の中に夢を見る。しかし、その中では、さまざまな関係性が省略されてきたのではないだろうか。

私たちが生きる世界はさまざまな関係性に溢れている。まずはそれらを直視することからはじめ、関係性を開いていくことがこれからの建築にとって重要なのである。

時を越え想いを繋ぐ復原設計

波多野純建築設計室
日本工業大学名誉教授
波多野 純



天井を外す室内設計への疑問

乱暴な言い方から始めることを、お許しいただきたい。近頃、古い町家の天井を外し、小屋組や電気配線を露出した室内設計の居酒屋を目にすることが多い。私はこのような設計に違和感を感じ、納得がいかない。最初にこの町家を建てた大工たちは、天井を張って小屋裏を隠そうとした。それを無礼にも暴いて……、そんな思いが去来する。

復原設計とは

私は、歴史的な建築の保存・修復さらに復原設計に長年取り組んできた。復原設計にはさまざまなパターンがある。歴史的な建築を調査・修復する過程で、建築当初の様相が明らかになり、そこへ戻す場合がある。旧粕谷家住宅(都文化財)では、享保8年(1723)と建築年代が判明し、類例が少ない当時の姿に復原した。福岡城下之橋御門(国史跡)では、痕跡から平屋を2階建てに戻した。西方寺本堂(横浜市文化財)では、鉄板屋根を茅葺きに戻した。出島和蘭商館(国史跡)では、当時の模型が残っていた。現在取り組んでいる福岡城潮見櫓(国史跡)は、藩主菩提寺に移築されていた櫓を原位置に戻す。

いずれの復原事例でも、遺構建物や部材痕跡、発掘、文書、図面、絵図、絵画、模型、古写真などあらゆる史料を分析し、歴史に忠実な、精度の高い復原を目指すことは言うまでもない。

隅木を残し歴史を伝える—佐賀城本丸御殿—

佐賀城本丸御殿(県史跡)は、天保9年(1838)に十代

藩主鍋島直正によって再建された。御殿は、明治維新後も残り、師範学校などに使われてきたが、徐々に取り壊された。それでも、藩主の居室である「御座間」は昭和32年(1957)まで残り、小学校の裁縫室などとして使われてきた。校舎拡張に伴い取り壊されることとなったが、幸いにも、「御座間」は移築され、近隣の公民館(南水会館)として活用されてきた。

長年の検討の結果、本丸御殿を復原・再建し、佐賀城本丸歴史館として活用することとなった。敷地には、鯨の門(国重文)が残るものの、御殿の建物は残っていない。当時の本丸御殿の一部である旧「御座間」(南水会館)に再び戻ってきてもらうことが、復原の信頼性を高める最重要課題となった。

昭和の南水会館移築時の棟札には、大工棟梁山田梅雄の名がある。再移築のための解体工事を進めるなか、山田さんは連日のように立ち会い、公民館のために改造した部分など、当時の状況を詳しく教えてくださった。

野地板を外すと、棟木まで達する野隅木が現れた。屋根は入母屋だから、野隅木の上半分は必要ない、変だ。当時の図面や古写真を見直すことで、謎が解けた。当初は、寄棟屋根で一部に2階屋が取り付けいていた。明治時代以降、2階屋が取り壊されたときに、形を整えるために入母屋屋根に変更された。その時当初の寄棟屋根を尊重して、長い野隅木が残された。さらに、南水会館への移築に際しても、その状況が維持された。そこには、不要だから取り外す、ではなく、創建当初の建物や職人に対する敬意が感じられる。時代を越えて職人の心が繋がっている。



佐賀城本丸御殿復原 玄関・式台



南水会館解体 野隅木が棟まで伸びる



入母屋を外し寄棟の野垂木を確認



足利学校復原 方丈・玄関・庫裡



書院



付書院 花頭窓に大成殿が納まる

花頭窓に納まる大成殿—足利学校—

「坂東の大学」と呼ばれ、フランシスコ・ザビエルなどによってヨーロッパにも紹介された足利学校(国史跡)。国宝級の書籍を多数所蔵する。また、寛文8年(1668)に建設された大成殿(孔子廟)が残り、孔子像・小野篁像・徳川家康位牌が祀られている。

足利学校は、大成殿の隣に、堀に囲まれて玄関・方丈・庫裡・書院をはじめ、裏門・衆寮(学生寮)・土蔵・木小屋などが建ち並び、南北に庭園が造られていた。主要建物は、宝暦4年(1754)の落雷により焼け落ち、幕府の支援で再建された。そのため、当時の図面や仕様書が、足利学校と幕府の文書を引き継いだ内閣文庫の双方に残っている。仕様書には、

御祈祷所方丈 桁行九間 梁間五間半 但屋根萱葺
 刈立厚三尺、屋根下三重小屋出シ桁作り、軒高壹丈
 六尺、軒出五尺、此坪四拾九坪半、外西南北三方に
 くれ縁付、幅三尺長延式拾式間半

宝暦五年『足利学校雷災後普請仕様書』とある。これだけでも正確に読みこなすのは大変である。「くれ(樽)縁」は、長さが22間半、幅3尺とある。もし1間=6尺なら「幅半間」と書いたはずである。とすれば1間は6尺ではないことになる。さまざまな情報を総合し、1間=6尺3寸であることを解明した。軒出・軒高はどこの寸法だろうか。現代の建築基準法の定義とは異なるはずである。近世では、柱真、礎石の天端から茅負の外角(屋根茅を支える横材の外側下端の角)までを測る。

仕様書は、再建までの間に何度も修正された。庫裡の奥に建つ書院は、庠主(校長)の住まいである。その屋根は茅葺きで計画されたが、栗の割板による板葺きに変更された。八畳2室からなり、「上之間」には、床の間・違い棚・付書院がある。仕様書には「付書院 地板 檜、花頭口、小障子四本建、欄間松皮菱」と詳しい。この付書院ができあがり、障子を開けてみてびっくりした。大成殿の屋根が、花頭窓にぴったりと納まるのである。これは偶然ではない、意図した設計だと確信し、時代を超えて、当時この建物に取り組んだ人々の想いが伝わってきた。

モダニズムと大仏様

鎌倉時代初め、大仏様が中国から導入された。さらに鎌倉時代後期に、禅宗様が伝えられた。大仏様は、モダニズムの建築家と相性がいい。丹下健三の東京計画、菊竹清訓の京都国際会館コンペ案など枚挙に遑がない。柱と貫からなる明快な構造と意匠表現が直裁的に結びつき、正直であるからだろう。大仏様では、天井を張ることが少ない。浄土寺浄土堂の上昇感のある室内は、天井を張らず、構造と意匠の一致により成立した。

同じ時期 伝統的な和様も、技術的な革新を遂げる。野小屋と桔木である。下から見上げる化粧垂木と屋根を支える野垂木を二重構造とし、その間に天秤状の桔木を入れて、大きな軒を軽やかに出す。ゴシック建築のリブ・ヴォールトも同様で、重厚な構造を隠し、細いリブが軽やかに天井を支えているように見せかける。まさに、トリッキーである。

モダニズムは正直な建築である。構造・機能・意匠の一体化は明快であり、納得しやすい。つねに合理的な説明を、正義として要求する。トリックはない。そこにモダニズムの危うさ、正義はひとつしかないという、原理主義的時代相も隠されている。とは言え、天井を外す室内設計に、モダニズムの真摯な覚悟はあるのだろうか。

歴史的な建築の保存・修復・復原と責任

私は、歴史的な建物の保存・修復・復原に取り組むとき、自分は無知である、何も知らないと思い知らされ、また何も知らないと自覚するようにしている。復原は、正確な根拠なしには許されない。年輪年代学やC14(放射性炭素年代測定法)など新たな調査方法が開発されてきた。あの時、部材を残しておけばと、悔やまれる事例も少なくない。建物の痕跡を読み詰め、基本史料に立ち帰り、再構築し、当時の人々の想いに一步でも近づくように努力している。それがおもしろく止められない。

文化財指定されていない建築なら、天井を外し構造を現すなど自由に改変していいのだろうか。この建築の歴史的価値や魅力を、未だ発見していないだけかもしれない。一度、立ち止まっていたいただけだと嬉しい。

Website「建築リノベーションアーカイブ.com」 から見えてくるもの

建築リノベーションアーカイブ.com
https://renovation-archive.com



JIA 再生部会
桐原武志



JIA 再生部会
柳沢伸也



JIA再生部会(関東甲信越支部)では、建築リノベーション事例に特化した建築情報データベース「建築リノベーションアーカイブ.com」を昨年4月に立ち上げました。リノベーションという言葉に厳密な定義はありませんが、我々は、「リノベーション」を、建物の歴史を残しつつ現代の用途に適応させる行為ととらえ、幅広い建築を対象に手を加えることで生き生きと使い続けられている事例を収集しています。

現在、日本ではつくっては壊しを繰り返す「フロー型社会」から、既存建物を長く使い続ける「ストック型社会」への転換点に立っています。建物の歴史を大切に継承するのか、無残に打ち捨ててしまうのか、我々はその選択を迫られています。リノベーションは、これまで歴史的に価値があると評価されてきた建物だけでなく、戦後の一般住宅やビルなど、これまで歴史的価値評価の範疇に入っていなかった建物も生き生きと使い続けるためのひとつの手法と考えています。リノベーションの内容は多種多様で、建物ファサードだけを保存したものから、悪条件を逆手にとって豊かな空間を生み出した事例までさまざまです。既存の建物を使い続けるためにはどのような手の加え方があるのか、ここが建築家の腕の見せ所です。

我々はまず、建築リノベーションのデザインにはどんな可能性があるのか？をテーマにデータベースをつくり始めました。立ち上げ時点では50事例から始まり、今年の7月末時点では166事例まで増加しました。国内135事例、海外31事例が含まれます。事例はキーワードや場所などから検索可能で、オープンソース方式を採用し、一般の方からの投稿も可能です。

当初は掲載基準なども曖昧でしたが、これらの作業を通じて、我々が思わず写真を撮りたくなるような建築リノベーションの特徴が少しずつ明らかになってきました。建物に刻まれた数々の記憶や、そこで繰り広げられた人々の物語を感じ取ることができるのは、リノベーションならではの味わいではないでしょうか。そうした設計には新築とは異なる手法や視点があり、建築家の職能としての活動範囲も広がりを見せています。これらの点の一部について、事例を通して紹介していきます。

建築リノベーションの手法と視点

その1「減築」

既存建物の一部を解体して階数を減らす、あるいは床面積を減らす「減築」は、リノベーションならではの手法です。建物の荷重を軽減して耐震性能を向上させたり、床を撤去して吹抜空間を設けたりする場合に採用されます。さらに、空調負荷を軽減させ、ダイナミックに内部環境を改善させた事例もあります。

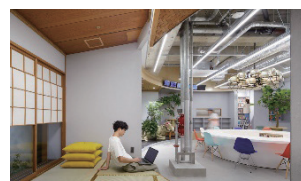


テラス沼田 (撮影: 吉田誠)

その一例が、撤退した大型商業施設を、市役所を中心とした複合施設へ再生した「テラス沼田」(設計: プランツアソシエイツ)です。地上7階建て、延べ面積2万4066㎡の建物を、建物中央の床を上下に貫く形で撤去し、内部に光や風が通り抜ける大きなアトリウム空間を創出しました。外壁を後退させることで空間に変化をもたらし、同時に空調負荷の軽減も得られました。「減築」により、工事費は建替えの半分に抑えられ、確認申請手続きも用途変更のみで済むという利点もありました。

その2「痕跡」

機能や目的に合わないものを新築では無駄として排除しがちですが、リノベーションでは、「痕跡」として新たな空間に取り入れ、魅力を引き出すことが可能です。



博報堂ケトル (撮影: フォワード輪柳友将)

例えば、「博報堂ケトル」(設計: Open A)では、赤坂の料亭という場所性と歴史性を利用し、リノベーションにより創造性を促す空間が生まれました。かつての灰皿は室名サインに生まれ変わり、肘置きは逆さまに取り付けられて本棚に変身し、木製建具は机に再生されるなど、遊び心あふれるオフィス空間が形成されています。社員や来客が円になって打ち合わせをするラウンジのために、料亭特有の小部屋の壁は大胆に円状にくり抜かれています。段差が残るなど、現代的なオフィスに求められるバリアフリー空間ではありませんが、「痕跡」を残すことで不便さを越えた創造性を促す空間が生まれています。

その3「挿入」

既存の建物を転用したり補強したりする際の「挿入」も、リノベーション特有の設計手法です。この場合、新たに挿入するものは素材や形を変え、新旧の対比を際立たせるのが一般的です。

例えば、国宝に指定された「旧富岡製糸場西置繭所」(設計:文化財建造物保存技術協会)は、できる限り作業時の姿を残しつつ、1階内部に構造体を兼ねたガラスボックスの閲覧室を挿入しました。挿入部分には現代の素材である鉄とガラスを用い、既存の木と漆喰との対比を行っています。文化財の建物としては、保存と活用を融合した大胆な介入です。

また、広島県尾道市の「ONOMICHI U2」(設計:SUPPOSE DESIGN OFFICE)では、倉庫の大空間の軀体を残しつつ新しい床を加えることで、ホテルを含む商業施設に転用しています。床の挿入により歴史を継承しながら建物内部に路地空間が形成されました。内装には古民家や造船の街にちなんだ木材、モルタル、スチールが使用され、小さな空間の連続と路地空間はまるで古民家が密集する尾道の街の雰囲気醸し出しています。新旧の素材を巧みに組み合わせることで、既存の建物に新たな魅力を付加し独自の空間を創り出すことが可能です。



富岡製糸場 (撮影:加藤純平)



ONOMICHI U2 (撮影:柳沢伸也)

その4「補完」

歴史的文化遺産の活用には、「補完」が多く用いられます。これまで保存に重きを置いてきた歴史的文化遺産も、平成31年の文化財保護法改正により「保存と活用」の視点が盛り込まれ、文化財の価値を遵守しながら現在に活かすリノベーションが求められています。

「京都市京セラ美術館」(設計:青木淳・西澤徹夫)では、歴史的な美術館の姿を後世に残しながら、正面広場を斜路状に掘り下げ、地下に新たな玄関が設けられました。これにより雨天の際の待機場もでき、美術館に必要な快適なレストランやショップも配置され、既存の課題が解決しました。さらに現代ニーズに適するよう、屋根の葺き替えやタイル補修、機械設備の更新および現代美術展示室や収蔵庫の増築なども行われ、機能や空間が補完されました。増築部分は控えめなデザインが採用され、外観には大きな変化がないように図られています。



京都市京セラ美術館 (撮影:桐原武志)

広がる建築家の活動と責務

リノベーションに積極的に取り組む建築家の活動を見ると、その分野が広がっていることが分かります。例えば、「テラス沼田」を設計したプランツアソシエイツの宮崎浩氏は、「不良債権になった建物を限られた予算の中いかに活用していくかは、建築家の社会的な責務」(『日経アーキテクチャ』2019年6月27日号)と述べています。宮崎氏は提示された条件やプログラムを鵜呑みにせず、自ら調査・分析し代替案を検討するコンサルタント的な立場にまで踏み込んで建物を設計することの重要性を強調しています。

また、「DIG IN THE DOMA」を設計し、自ら施工も行うランチアーキテクトは、施工段階で現場の状況や施工者の意見を求め、柔軟に対応しています。そのため、設計図面には未定の空白部分を残し、現場で決定するという方法を採用しています。新築とは異なり、リノベーションでは解体してみないと分からない部分が多々あるため、設計段階では決めない「余白のある図面」が描かれるようになりました。現地で様子をうかがうと、設計が施工の領域に踏み込むことで創作の自由度が広がり、新たな可能性を感じました。

このように、リノベーションは事例ごとに異なる解決策が求められ、建築家は単なる設計者の枠を越え、幅広い知識と多様な役割が求められます。新たな視点と柔軟な対応、そして密接なコミュニケーション等が必要ですが、同時にリノベーションには新しい建築の可能性が広がっています。

再生部会の活動について

再生部会は、東日本大震災の際に文化庁の文化財ドクター派遣の初動を担い、また、東京弁護士会歴史的建造物部会と協働で「既存建築を使い続けるための諸制度見直し研究会」を立ち上げ、建築基準法3条1項「その他条例」の普及や促進に努めてきました。さらに、本部部会時に作成した「未来に残したい20世紀の建築」リストは日本建築学会のデータベースと統合され、現在、文化庁の近現代建造物緊急重点調査事業(建築)の基礎データとして使われています。

現在は、大橋智子部会長のもと、近現代建造物を中心に価値ある建物の保存活動について情報収集し、保存再生を支えている制度について勉強会を行っています。建築を使い続けることの重要性を社会へ訴え、より豊かで美しく安全な都市と建築の具現化を目指しています。「建築リノベーションアーカイブ.com」の取り組みも再生部会の活動の一環です。再生部会は関東甲信越支部に所属していますが、全国からどなたでも参加可能です。ご興味ある方はぜひお問い合わせください。

第35回 JIA 神奈川建築 WEEK かながわ建築祭 2024

地域の中の建築家～いま「みんなの家」を考える

開催日：2024年3月1日(金)～3月3日(日)
会場：横浜市役所アトリウム

神奈川地域会
2023年度を振り返って

神奈川地域会 11 代代表
柳澤 潤



令和5年度、神奈川地域会では昨年度より進めてきた「タウンアーキテクトを求めて」という活動の枠組みの中で、①まちあるき②建築フォーラム③建築祭(シンポジウム、学生卒業設計コンクール、会員活動展ほか)④こども空間ワークショップなど、という大きく4つのイベントを軸に活動を進めてきました。

①まちあるきでは、7月に東日本橋のワーキングスペースなどを見学。11月には関内地区の4つの建築事務所を巡り、それぞれの活動を通して地域で活躍する建築家像を浮き彫りに。そして3月の建築祭中には横浜国立大学の菅野裕子さん(都市イノベーション研究院特別研究教員)による関内・馬車道地域における歴史的建造物の解説付きツアーを実施しました。②建築フォーラムでは、12月に赤松佳珠子さんをお招きし、「学校建築のこれから」と題して、今学校建築が地域とどのようにつながるべきか、ICT導入の効果など、その新たな役割について講演いただきました。後半のシンポジウムでは飯田善彦さん、八板晋太郎さん、柳澤の3名が横浜市内で竣工した小学校のレビューを行い、さらに横浜市建築局の寺口達志課長(公共建築部学校整備課)をお招きし、建築家と発注者双方の立場で学校建築の難しさと可能性を議論。

会場には60名を超える方々が参加されました。

③神奈川地域会の恒例で、最も力を注いでいる建築祭が昨年度も行われました。横浜市役所アトリウムをお借りして3日間、パブリックな空間での開催となりました。初日には若手建築家4名をお招きし、「『みんなの家』って何だろう、これからの公共のあり方を問う」と題して、今若い建築家が何を考えて地域や社会の中で建築をつくっているのか、「みんなの家」という活動を通して熱く語っていただきました。60名近くの来場者の中には学生も多く、若い世代の関心の高さがうかがえました。最終日の「神奈川県7大学1専門学校卒業設計コンクール」では各校からの選ばれた25作品を4人の建築家審査員が一人ひとりの作品を見て回り、1次選考、2次審査を経て、金銀銅賞、審査員特別賞が選ばれました。2次審査では選抜された学生らがアトリウムに設置された大きなスクリーンに自身の作品を映し出し、一般の方も学生のプレゼンテーションに聞き入っている姿が印象的でした。その横で行われていた地域会会員による活動展には「いいね」シールを来場者に貼ってもらい、最高得票作品を表彰する「シチズンアワード」を初めて試みました。その他、こども空間ワークショップでは、横浜市役所で開催された「よこはま建築ひろば」をはじめ、地域の小中学校などに会員が出向いてファシリテーションし、地域のお子さんや親御さんと“建築する”という行為を通して交流を深めました。上記さまざまなイベントに協力くださいました関係者の皆様に感謝申し上げます。

かながわ建築祭 報告

建築祭 2024 を終えて

建築祭実行委員長
井上雅宏



「第35回JIA神奈川建築WEEKかながわ建築祭2024」は横浜市役所アトリウムを会場に卒業設計コンクール、JIA神奈川会員活動展、シンポジウム、まちあるき&レ

クチャーを開催しました。公共の中心的存在である横浜市役所アトリウムでかながわ建築祭を開催できたことは意義深く、来場者は600名を超えました。

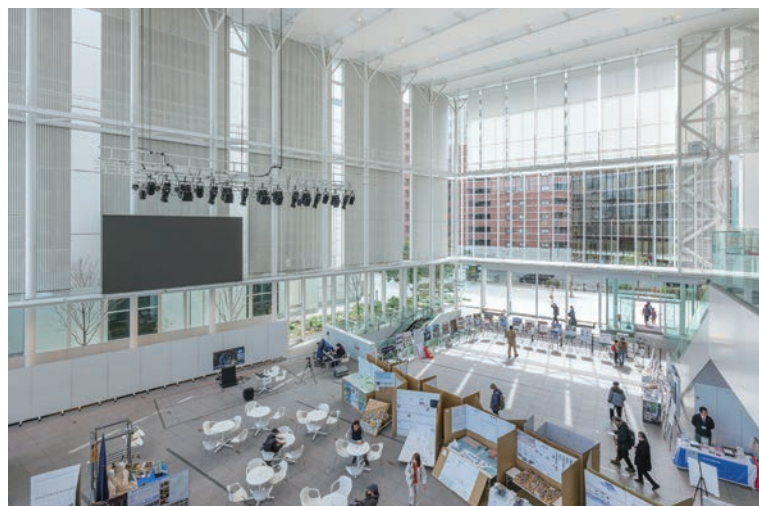
シンポジウムでは大西麻貴氏、百田有希氏、近藤哲雄氏、久山幸成氏を迎え、「みんなの家(東日本大震災の復興時に建てられた建築家ら有志による地域住民等が集まる施設)」における公共的意義について考察。具体的には令和6年1月1日に発生した能登半島地震における地

域復興や地域社会のあり方について議論しました。JIA 神奈川は2022年度から「タウンアーキテクト」をテーマに地域社会のあり方とそこに供する建築家の職能について考察を重ねており、復興も含めた今回の議論は地域を再考する糧を見つけ出す考察に結び付いたと考えています。

また、「まちあるき・レクチャー」では横浜国立大学の菅野裕子さんをお招きし、横浜市中区馬車道・関内周辺に残る歴史的建造物を見学しました。これらの建物は関東大震災後に建てられ、当時の建築家が施した設計手法が横浜の街並みを形成しています。風景として溶け込んでいるこれらの景観を生み出す建築家による設計は、地域の価値、地域文化を創り出していると実感しました。

第35回をむかえる「神奈川県7大学1専門学校卒業設計コンクール」では、地域に根差して経年をふまえた建築の変化を示唆する提案(山田伸希さん(横国大))が金賞、「井戸を掘る」という自らの手でインフラ整備する提案(高部達也さん(慶応大))が銀賞に選ばれました。

近年の大卒コンの傾向として単一の構想力で建築をくみ上げるものは消滅しており、すべての作品が局所的・他律的となっています。審査員長の福島加津也氏は、「今年も僕らを超える作品はなかった。今後10年私も建築家として安泰であり今日も安心して帰れる。どうもありがとう」と苦笑交りに総論を述べましたが、この総論は極めて示唆的だと感じます。高度成長社会から規制社会へ後退し続ける背景がありながら、実社会において建築は極めて構築的な職能であり、それを抜きに営むことはできません。「君たちにそれができるのですか」と。さらには、働き方改革というぬるま湯で育った者たちに、



今回の会場となった横浜市役所アトリウム
(写真：TERAKAWA 写真事務所 (JIA 神奈川個人協力会員))

厳しさを味わいながらそれでも建築をつくり続けた我々は負けるはずはない、という確たる自信の表れを感じました。

近い将来、わたくしは観客として、建築の形体に対する力強いアプローチに臆せず挑み、かつ建築を成り立たせるための揺るがない考えをベースにした勇者が現れ、建築家である審査員たちの熱い議論を見てみたいと思っています。建築家が全力をもって評価する作品が現れた時、脱帽した彼の背中に、規制社会というこの鬱屈した時代の先にある設計者の本当のものづくりが見えてくると思うからです。

今年度も横浜市役所アトリウムを会場に建築祭を開催する予定です。1年間の活動をもって、来年の建築祭、そして学生の門出ともなる卒業設計コンクールへ向かって、今年度の活動を邁進していきたいと思っています。

シンポジウム

『みんなの家』って何だろう。 これからの公共のあり方を問う

司会・モデレーター
田井幹夫



東日本大震災の後、伊東豊雄氏が『みんなの家』という心の拠り所のような場を提唱し、建築家によっていくつか計画されたことは記憶に強く残っています。しかし、その後は……？ 今回のシンポジウムでは、『みんなの家』を設計してきた大西麻貴氏、百田有希氏、近藤哲雄氏、久山幸成氏、当代表柳澤潤に話を伺うことで、『みんなの家』に関わる意味、そこに見出された「公共性」、そして今後が垣間見えました。「家とは身体の一部である」「建築とは人間そのもの」「個々の側に立つ」「求められているから作る」など、意味深い言葉が投げかけられ「公共」

の本質、そしてこれからは示されたように思います。さらに、今年初めに起きた能登半島地震のレポートが大西氏からありました。我々建築家に何ができるのか、この大きな問いかけに、ヒントとなる言葉が散りばめられた会でもありました。



シンポジウムの様子 (写真：TERAKAWA 写真事務所 (JIA 神奈川個人協力会員))

卒業設計コンクール

神奈川7大学1専門学校 卒業設計コンクール



担当 伊藤立平 八板晋太郎

神奈川県7大学1専門学校の25名の学生が各校の代表として出展し、力強いメッセージが込められた模型・パネルが展示されました。アトリウムの大空間に並ぶ作品からは圧倒的な迫力が広がり、一般の来場者からも大きな関心が寄せられました。

審査会では審査員長の福島加津也氏、JIA新人賞を得

られた畑友洋氏、高野洋平氏・森田祥子氏ら4名の建築家が自らの建築に向かう姿勢を明快に述べた上で、特にテーマの独創性や新たな問題提起をしている作品について活発な議論が交わされました。

そのなかで、金賞を山田伸希さん(横浜国立大学)「布置を解く」、銀賞を高部達也さん(慶應義塾大学/環)「みんなでPersonal Water Networkをつくる」、銅賞を高橋梨菜さん(関東学院大学)「まちを癒して」が受賞。金・銀賞の2人は全国大会へ進出し、2作品とも三次審査まで選ばれ、山田伸希さんは審査員賞「前田賞」を受賞されました。

AWARD

シチズンアワード (JIA 神奈川会員活動展)



担当 高橋隆博 仲亀清進

JIA神奈川は会員の建築家約200名、法人協力会員50社、会友(神奈川地域会の会員組織)2社の多くの仲間とともに活動しています。会員展へは正会員、協力会合わせて32団体の皆様に出展いただき、建築をめぐる、設計、デザイン、建築技術、まちづくり、歴史的建造物への取り組みなど、多彩な内容が市民へ紹介されました。今回はシチズンアワードと題し、来場者の方々に「いいね!シール」を貼っていただくことで投票を募りました。32団体それぞれに「いいね!シール」が貼られ、来場者の

皆様のお気持ちが作品へ添えられました。来場者アンケートにも来場者が参画できることへの評価があげられ、来場者とともに学び合える展示会となりました。

最優秀賞 小泉アトリエ「野毛山動物園なかよし広場(ふれあいコーナー/休憩棟/トイレ)」

準優秀賞 田村設計「一般流通無垢木材を構造材とした中学校武道場」



シチズンアワード展示風景 (写真: TERAKAWA写真事務所(JIA神奈川個人協力会員))

建築フォーラム2023

テーマ:「学校建築のこれから」

2023年12月16日 関東学院大学

JIA神奈川は2018年に学校建築の研究会を発足し、以来、勉強会や講演会などを重ねています。学校建築は高度経済成長期に急速な人口増加のなかで数多く建てられ、築50年ほどを迎えた現在、建替えや改修が急務とされています。弊会では2018年に柳澤潤代表、八板晋太郎幹事長、飯田善彦前代表の3名が小学校(横浜市立)の建替え事業のプロポーザルに選定され、2023年に3校ともに竣工しました。本フォーラムは、「学校研究会」の1つとして2021年に実施した「建築フォーラム2021」に続いて、竣工した3校の報告を含めて行いました。

基調講演には赤松佳珠子氏を招聘し、学校建築の各地の取り組みをお話いただきました。「流山市立おおたかの森小中学校、おおたかの森センター、こども図書館」「立川第一小学校 柴崎学習館 柴崎学童保育所」等、生徒たちの活発な活動を生み出す設えや、学校建築を通じた地域との繋がり、また長野県のNSDの取り組みについてもお話いただきました。

第二部では、先の3名が、2023年に竣工した横浜市立都岡小学校(八板建築設計事務所)、横浜市立汐見台小学校(Archishop Studio(前飯田善彦建築工房))、横浜市立上菅田笹の丘小学校(コ

ンテンポラリーズ)について、プロポーザル案や基本計画、竣工に至る経緯が報告されました。またこの3校では設計者による合同検討会が開かれ、ペアガラスや空調・換気・断熱仕様など、標準設計にはない設備が導入されたことも説明されました。

第三部では、横浜市建築局公共建築部学校整備課長の寺口達志氏を迎え、横浜市の学校建築の現状について、参加者も交えてディスカッションをしました。学校建築の標準設計のあり方が大きく取り上げられ、実状と標準設計の乖離が指摘されつつも、横浜市では300校以上の学校で改修の必要がせまられており、それに対してどのように取り組むべきか、議論は教室、什器、校舎、さらに地域社会などに広がりました。行政の運営と現在の生徒たち、学校指導要領など学校建築をめぐる課題はさまざまであり、その課題は地域や実状に応じて日進月歩のごとく変化しています。各々の解決には、制度よりも丁寧な対話の蓄積から、学校建築や地域社会に適した公共建築の姿が表れるのではないのでしょうか。本フォーラムでも幾度と「議論の場」という言葉があげられました。弊会では今後も学校建築、公共について議論し、考察していきたいと考えます。(井上雅宏)

かながわ・けんちく・アカデミー 2023 タウンアーキテクトを求めて

ケーススタディ vol.5～vol.7

「かながわ・けんちく・アカデミー」では、「タウンアーキテクトを求めて」をテーマに、年間を通してレクチャーや見学会を実施し、「地元へ未来を託す建築家像のあり方」を学んでいます。2023年度に行った第5回、第6回、第7回の様子をレポートします。

第5回 ケーススタディ vol.5 日本橋横山町馬喰町問屋街

今回の講師の勝亦優祐氏と丸山裕貴氏(勝亦丸山建築計画)は、とても現代的で若手建築家を先導するスタンスで街に入り込み、実績を上げています。というのも、勝亦さん、丸山さんはまずそれぞれに拠点を持っていらっしゃいます。勝亦さんは、拠点を富士市吉原商店街の廃墟ビル1棟を改装し(マルイチビル)、最上階のシェアオフィスに構えています。そして丸山さんは、今回訪れた日本橋馬喰町の問屋ビルを改装し、SOHOとしたSANGOを拠点としています。そして、2拠点ともが事業計画も含めた企画運営に関わっていて、極めて柔軟で積極的なタウンアーキテクトの新たな姿勢を示してくれていると感じました。

東日本橋の「江戸通り」「清州橋通り」「清杉通り」を三辺にしたような三角形の一角は、江戸時代から続く問屋街で小規模の

ビルが建ち並びます。だからこそ、地権者が多数にわたることもあり、大規模再開発がしづらい状況とも言えるでしょう。そこでUR都市機構が英断して若手のクリエイターたちに期間限定で街を変えていく企画を募集したのが始まりです。おふたりが、元問屋ビルをSOHOという住みながら働くことができる場に変えたことは重要です。問屋街という、営業時間以外人影がなくなる街に人を住ませる、しかも働きながら、という発想は周辺に似たような場を生み出すのに十分な影響力でした。(田井幹夫)



第6回 ケーススタディ vol.6 横浜「関内」「黄金町」設計事務所巡り

見学事務所 みかんぐみ、アーキシップスタジオ、オンデザインパートナーズ、コンテンポラリーズ・アーキテクトカフェ・田井幹夫建築設計事務所・GENINOUE(守谷ビル)
見学作品 「黄金町エリアマネジメントセンター」が管理するスタジオ群

第6回のまちあるきは、関内に集中する建築家のアトリエを見学させていただき、貴重な機会を設けました。

「関内」「黄金町」は多種多様な姿があり、みなとみらいのように大規模な開発による地域に隣接しながら、双方は正反対の街並みを形成しています。横浜市中区「関内」は戦後の接收解除とともに事務所・店舗・居住空間などを兼ね備えた防火帯建築をはじめ、多くの建物が同時期に建てられました。しかし2000年代にはそれらの建物の空室率は高く、街の空洞化が課題となりました。また当時、「関外」と呼ばれる地域の1つ「黄金町」「日ノ出町」も課題を抱え、「関内外」は横浜市の施策とともに再生を図ってきました。2000年代後半から「創造都市」をテーマにクリエイターを誘致する施策がとられ、空室となったビルなどへ建築家をはじめ、多くのクリエイターの拠点が「関内外」に設けられ、またそのクリエイター同士の繋がりも広がりはじめました。

見学した「みかんぐみ」「コンテンポラリーズ」は築40年ほどのビルに入居し、「オンデザインパートナーズ」「アーキシップスタジオ(前 飯田善彦建築工房)」は築60年を超える防火帯建築に事務所

を構えています。日ごろ建築作品として見知ることができる建築家のスタジオを実際に拝見し、設計現場の裏側を見ることができました。どのスタジオも一般的なオフィス空間とは大きく異なり、空間自体が独創的です。「オンデザインパートナーズ」は、1階がイベントや展示等に使用できる場となっており、実は上階のオフィスに繋がる穴のような抜け道もつくられていました。「アーキシップスタジオ」は1階がライブラリーを兼ねたカフェで、建築の書籍を自由に閲覧できる心地よい空間でした。「みかんぐみ」は巨大な横引戸があり、空間をドラスティックに変えることができる仕掛けがありました。「コンテンポラリーズ」は3つ(2023年11月当時)の事務所が1つの場を共同で使用しています。これらは建築士事務所として閉じるのではなく、街に対してどのように接点を設けるか、あるいは会社の中でチームがどのように関係性を持つかを深く考えたつくりになっているがゆえに、常に時代を先取りする作品をつくりつづけられるのだと感じました。(井上雅宏)



ひろば

第7回 ケーススタディ vol.7 関内・馬車道・海岸通りの歴史的建造物を巡る

横浜関内界隈は言わずと知れた歴史的都市であり、ふらっと歩けば数知れずの様式建築に巡り合える場所です。講師の菅野裕子さんと一緒に巡ることで、いかに街がその前の時代を引き継いで風景を生み出しているのか、そしてそうであるべきであることを実感することができました。横浜市役所アトリウムでのレクチャーで、西洋建築史の基本である柱のオーダーなどの知識を伝授されて街に出ると、その建築に表れる様式がいかに建設時の時代背景を担い、さらに周辺建築との調和や対比を意識しているのか、

菅野さんの口からとめどなくこぼれ落ちます。「街の風景にいかに参加しているのか」がこれら様式から読み取ることができると菅野さんは言います。最後に訪れた「ホテルニューグランド」は、目の前の山下公園が関東大震災の瓦礫で埋め立てられた場所であり、その様式は復興や再生を表す「ルネッサンス」様式で建てられた、というのは象徴的で感慨深いお話でした。(田井幹夫)

撮影: TERAKAWA 写真事務所



中原崇志氏に聞く 情報を読み解きかたちにする



今回お話をうかがったのはミュージアムデザイナーの中原崇志さん。日本科学未来館や21_21 DESIGN SIGHTなどで開かれる、さまざまなジャンルの展示の展示構成やデザインを手掛けています。普段どのように仕事を進めていらっしゃるのか、また仕事をする上で大切にしていることなどをお聞きしました。

— 展示デザインの仕事はどのようなきっかけで始めたのでしょうか。

長崎の大学で建築を学び、卒業後は意匠設計に進むつもりだったのですが、地方大学出身ということもあって、そのままアトリエに入っているものか迷いがありました。当時大阪にIMI(インターメディアム研究所)というジャンルを越えて学べる学校がありました。美術史家の伊藤俊治先生を中心に、建築家の吉松秀樹さん、現代美術家の椿昇さんなどが立ち上げた学校です。もともとグラフィックや映像など建築以外のことにも興味があったので、卒業後まずそこに入りました。このときに椿さんの作品づくりや、展示会の手伝いをよくしていて、実践を通して多くのことを現場で学びました。

それから一度建築に戻り、有馬裕之さんの事務所で4、5年住宅などの設計を経験しました。その後、以前から交流があったデザイナーの方に声を掛けていただき、上京して展示会などの仕事を手伝うようになり、だんだん単独で動くようになっていきました。今は私個人で受ける仕事がほとんどですが、所属している会社はIMI時代の同級生で運営しています。

— 展示デザインの仕事はどのように話ができるのでしょうか。また、中原さんの強みを教えてください。

東京に出てきてすぐに、日本科学未来館(以下、未来館)の展示のコンペに通りました。それ以降、未来館では展示会があるたびに展示デザインを決めるコンペに参加し、実績を積んできました。ここ数年は21_21 DESIGN SIGHTの展示会も担当しています。21_21 DESIGN SIGHTを手掛けるようになってから、いろいろな方が声を掛けてくださるようになり、仕事が拡張しています。

私は、例えばこのグラフィックデザイナーと組みたいとか、こういう映像作家と組みたいというように、チーム構成を自由に考えていきます。展示は空間だけではなくていろいろな表現を駆使しながらつくるので、そういう自由さがあるのが私の強みかもしれません。それぞれの案件によって座組を変えながらやっています。

進め方も、企画段階からグラフィックデザイナーなどに入ってもらい、一緒にディスカッションしていくことが多いです。企画ブレストからみんなを巻き込んで、一気に打ち合わせをしていく感じです。

— 仕事は具体的にどのように進めていくのでしょうか。

展示は、いきなり設計に入る場合もありますが、リサーチしてプランニングする場合も多いです。例えば美術作品だったら、それをどう見せるかが出発点になりますが、未来館での展示は、ある科学情報を人に伝える展示にしておくはいけません。研究者にしか分からないような専門的なことを来場者にどう伝えるか。まず情報の読み解きから始まり、それをどう形にしていくか、どういう空間にするかを考えていきます。

かける時間はプロジェクトによって異なりますが、1年ぐらいかけてリサーチして徐々に形にしていくのが私にとっては理想的です。

— 毎回扱うジャンルが異なると、広範な知識や好奇心が必要になりますね。

はじめは難しく理解できないことも、それを形にするために議論をする時間がすごく面白いんです。

奄美大島世界遺産センターでは、最初に環境省や専門家の方々と世界遺産の森を歩いてフィールドワークをし、植物や動物の情報を共有してもらい、その体験をもとに展示コンセプトを「生命の脈わいを感じる繋ぐ」としてフィールド探索型のミュージアムにすることにしました。

展示室に森を再現するのですが、動物によって活動する時間帯が異なるのに同時に見せてしまうと再現になりません。そこで、照明や映像を使って、30分に1回、24時間時間が流れるタイムスケープがある空間にして、環境が変化するようにしました。それから、実際森ではなかなか動物に出会えないので、見つける感覚が得られるようにランドスケープやサウンドスケープも駆使しました。生き物によって特性が異なることを感じてもらえるような工夫をしています。



奄美大島世界遺産センター



日本科学未来館での企画展「トイレ？ 行っトイレ！～ボクらのうんちと地球のみらい」

—空間としてインパクトがあったり、印象に残るようなことも意識されているのでしょうか。

インパクトというよりは、シーンを作っていく意識があります。2014年に未来館の企画展「トイレ？ 行っトイレ！～ボクらのうんちと地球のみらい」では、展示空間に大きな便器があり、その中に入るシーンがあって、これが当時SNSで拡散されて来場者が増えました。確かにインパクトはあったのだと思いますが、これは排水や下水道の問題などを、子どもをターゲットに楽しみながら知ってもらえるように考えた展示でした。大きな便器は表の世界から地下の世界に入るシーンの切り替えとして設置しました。

この展示は入口は面白そうで入りやすいのですが、展示を見た後は社会問題を持ち帰ることになる、未来館らしい、いい展示でした。

—展示の建築設計とは大きく異なる点や、難しい点はどんなところでしょうか。

展示は形の検討ではなくてストーリー作りから始まるので、最初はそれに戸惑い、かなり苦戦しました。今は小さなことをこつこつ積み上げて考えていく感覚で、どういう体験を用意するかや、どうしたら伝わるかを検討してから形に入っていくことが多いです。展示構成図というものを毎回作るのですが、展示内容ひとつひとつがどのような文脈で繋がっていくかを最初の段階で整理して図示化します。それが展示ストーリーや平面構成に繋がっていきます。

それから展示自体は、空間に高さがあるとすごく難しいです。展示物は下にあることが多いので、高さ方向をどう作っていくかは毎回悩みます。

—仕事をするうえで大切にしていることを教えてください。

私はやはり建築設計を経験していることが大きくて、目の前の展示のことだけ考えるのではなく、少し引いて建築と展示を自然と結びつけて見ている気がします。領

域をあまり持ちたくないというか、空間としても体験性を大事にしています。

四国村で開かれた写真家の^{しんつ ぼけんしゅう}新津保建秀さんの展示では、建築は細長い空間で、普通はその白い壁面に展示していくのですが、あえてそれを無視して通路の間にワイヤーを掛けて、写真も民具も吊って、それをめくるように歩くことでいろいろなシーンに出会えるようにしました。

長野県立美術館でのファッションデザイナー^{くろごうち}黒河内真衣子さんのブランドの展覧会「10 Mame Kurogouchi」では、展示室はフローリングなんですけど、黒河内さんが地元長野の風景の話をよくされていて、雪の結晶などを見て作品を作ったりしているとうかがったので、そういう感覚を空間として再現したいと思い、床も全部白くしました。

山陽新聞社の「さん太しんぶん館」は、展示室からガラス越しに印刷工場が見えていて、そのガラスにグラフィックを入れることで、工場が展示物のように見えるようにしました。まさに領域を越えて考えた例です。

空間の中でそれがどう展開されていくかや、小さな情報がどのように空間化されていくか、そういう意識は普段から気をつけているポイントかもしれません。

展覧会のために新しい技術を開発することもありますけど、完全にデジタルだけではつまらないので、どうしたらアナログ的な空間体験や身体的な体感性を付加できるかは常に考えています。

—貴重なお話をありがとうございました。

インタビュー：2024年6月6日 中原崇志さんの事務所にて
聞き手：渡辺猛・関本竜太・大塚浩子（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

中原崇志（なかはら たかし）

ミュージアムデザイナー

建築アトリエ・有馬裕之＋Urban Fourthを経て、建築、インテリア、ミュージアムデザインの分野で活動。主な実績に、「イヴ・サンローラン展」「10 Mame Kurogouchi」の展覧会場構成。「北九州市科学館」「奄美世界遺産センター」などのミュージアムデザイン。受賞歴として、日本空間デザイン賞金賞、SDA大賞・経済大臣賞、ADC賞など。

立ち位置を探して



廣部剛司

1991年日本大学卒業

手が止まる

「君、もう来年出しなさい」。

卒業設計の提出1ヵ月ほど前に、指導されていた坪山幸王先生に言われた言葉。

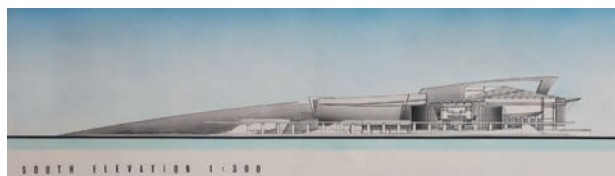
テーマは良いけれども、君の設定したコンセプトと建築の形態が合っているとは思えない。というのがその理由だった。レンゾ・ピアノ設計による関西国際空港の建設が進んでいた時期だったこともあり、そこから船でアクセスできる海上迎賓館をつくるという計画。海洋建築工学科という学科の特徴からウォーターフロントでの計画を推奨されていたこともあり、テーマの設定としては明解だった。にもかかわらず、なぜ冒頭の言葉に繋がってしまったのかというところには、その時抱えていた(そして今にもつながる)自分自身の葛藤に原因があった。

ある日、設計の道へと

大学に入学したときには、まったく「建築家」を目指してはいない学生だった。最初の授業で学校内を慣れない手つきでデッサンしながら「入る学科を間違えた」とすら思っていたのだ。高校生の途中まではプロのギタリストになることしか考えていなかった。良き指導者のおかげもあり、音楽で生きていくことの厳しさを知ってからは、消去法的に理系に進んだ感じだった。しかし、2年生になったばかりの頃、設計課題が自由に案を考えるものに変化していくと、あるとき「これは音楽をつくることに似ている」と感じた瞬間があった。そこからは一気にのめり込んで、建築家の作品集を漁り、下手でもスケッチを繰り返す……という生活が日常になっていった。書籍から得られる「建築」、実際に足を運んで得られる「建築」。それに向き合うために本に目を落とし、空間を体感するために旅を続ける。その向き合い方は、今に至るまで変わっていない。

日本人であること

学生時代の自分にとって、実は思いのほか高い壁となって立ち上がったのは「日本」だった。古い日本家屋で育った自分にとっては、その空間の持つ良さも、翳りが生み出す畏れのようなものも五感に染みついたものだった。対して、モダニズムの軽やかな建築を知るにつ



卒業設計「逢坂迎賓館」南立面図

れ、自分はその狭間でどう振る舞っていけば良いのかと悩み始めたのだった。日本の近代建築史について調べていくと、西洋様式建築に日本風の屋根をかけたもの(いわゆる帝冠様式)に行き当たる。折衷主義としては一つの答えなのだろうけれど、どうしてもこのやり方を是とはできない自分がいたのだった。よりによって「国の迎賓館」を設定してしまった卒業設計はその延長にある戦いだった。だから坪山先生の「日本の様式を問うなら、まず屋根を掛けなさい」という言葉に過度に反発していたのだろう、と今になると思う。扱いにくい学生でご苦労を掛けたと思うけれど、真剣に向き合っていたことに、ずっと感謝している。

結局、建築の形態としては直接的な和風の引用をできる限り避け、ヒューマンスケールで感じる空間のエレメントとして、線的な要素の多い「和」のモチーフを入れ込んでいった。

とはいえ、悩んだ時間が長かった分、プレゼンテーションとしては消化不良だったと思う。そして、その葛藤は芦原義信先生の事務所に勤めてからも、個人的な申し送り事項のように続いた。

世界放浪の先に

7年間の事務所勤務の後に、8ヵ月間の世界放浪へと旅立つことになるのだが、それもいわば徹底して海外の建築にふれることで、「日本人」としての自身を問い直すことでもあったように感じている。

長い旅程を経てようやく「どんなに意識していなくても、どこかに日本人としての自分は残るだろう」という気持ちに至った。そのとき初めて「独立して建築家を名乗ろう」と思えたのだ。

このほろ苦い卒業設計は、設計者として日々愉しみを感じながら建築と向き合っている「今」に繋がっている。

晩成に向け歩を進めて



かしま
鹿島信哉

1983年～1990年 芦原建築設計研究所在籍

小学生の頃、駒沢公園の近くに住んでいた。友だちと作った草野球チームの早朝練習場が「駒沢公園・中央広場」。管理事務所から学校へ毎週月曜日に苦情が来て先生からは大叱責。それから10年、京都工芸繊維大学へ入学。即、『街並みの美学』読書レポートが課され、建築+街並みの「学びの原点」となる。この伝統は今も続いているという。師・芦原義信氏とはこのような間接的で運命的な出会いがあった。

大学4回生の夏休み、芦原建築設計研究所での1ヵ月間のオープンデスクに臨む(3人参加)。当時芦原さんは東京大学教授で夕方事務所に現れ、奥の方からサンダルの音をペタペタ響かせ「さてえ～、さてえ～」と言いながら設計室に入ってこられる。僕は横浜の小学校の設計チームで図面を描かせていただく。芦原さんが様子見て優しく声を掛けてくれるも、緊張でまともに会話を交わせなかった。最終日前夜、芦原さんに「君たちはこれからどうしたいんだ？」と問われ、3人皆が入所希望表明。「よし、明日1日課題で試験をしよう」となり、最終日朝から8時間の設計課題に臨んだ。大きな邸宅の平立断面図・透視図を描きあげ、夕方スタッフ皆の前でプレゼンテーション。質疑・指摘が飛び交う中、芦原さんからは「図面の中の人をもっと丁寧に描いて空間の雰囲気を表しなさい」と。今でもスケッチでは人の雰囲気ある所作を描いて検討するよう心掛けている。京都に戻り晩秋、ベニスのシンポジウムに出掛ける直前の芦原さんから1通の直筆はがきが届く。芦研への入所許可の通知であった。

7年間の修行時代が始まる。当時芦研は40人超の事務所、渋谷の同じビルに構造と設備事務所があった。芦研には小さな食堂があり、芦原さんも一緒に食べて正に「同じ釜の飯を食う」大切な場だった。打ち合わせはプロジェクトごとのチームで行い、所長テーブルで繰り広げられる。芦原さんがコンセプトを提示するスタイルではなく、スタッフが検討する中で多様な計画可能性を示し、討論しつつ案をディベロップさせていくスタイル。芦原さんの言葉を的確に捉え、奥に潜んでいるイメージを読み取らねばならない。1度だけ芦原さん自らが鉛筆でスケッチし、定規を使って図面を描く姿を目にした。それ

は「国会議事堂・両院正面玄関前の噴泉」の設計だった。

入所後すぐ「横浜市民ホール・関内ホール」の設計チームで設計に携わり、1年後には現場常駐の監理へ移行した。ある日芦原さんが現場確認に来られ、清水建設社長と共に入場するや否や急に何かを拾って高級スーツのポケットに。現場事務所に戻って「現場はいつも綺麗にしておかないと美しい建築はできないよ」と一言。たばこの吸い殻を掌に渡された。

また横浜市都市デザイン室からは「ホール外壁タイルを馬車道に合った茶色にしてほしい」と強い要望があり、芦原さんに伝えると「設計通りに白いタイルを貼りたいね」と確執が生じた。至急白いカマボコ型タイルの現物サンプルを特注製作して、この白色が街並みになぜ適合するのか、外壁にサンプルをセットし誠意を持って滾々と優しく説得・説明する姿には学ぶものを感じた。仕事のプロセス、人とのコラボレーションを楽しむことも大切であることも教えていただいた。

在籍時はいくつかの大きなプロジェクトに携わらせていただいたが、退所独立の時を迎える。芦原さんの叔父・藤田嗣治の絵がある小さな部屋で独立を願い出る。しばし沈思黙考、芦原さんから「う～ん、君は大器晩成タイプなのかなあ？」と。未熟であることを自覚するも、師の言葉で独立後の目標が覚醒される。愛ある別離の鞭と自分に言い聞かせ、今も悶々と「晩成」目標に向け自己研鑽の日々を送っている。

数年後OB会幹事役になり、芦原さんご夫妻をお招きして皆と笑顔で会食を楽しんだ。数日後、直筆の丁寧な「お礼はがき」が届く。芦原さんのこのようなお気遣いが嬉しく、今でも師の気持ちとはがきを大切にしている。



幹事だった時の芦原義信ご夫妻を囲んでの芦原建築設計研究所OBOG会

地球の71.132419045%の 海の上に浮かぶ移動する建築



堀内功太郎

地球上の28.8%を占める陸に建てられる建築たち、その傍ら、残りの71.1%の海を堪能せずにこれまで世界中のプロジェクトに携わってきた。しかしコロナ禍で国移動に不自由を感じた頃から、海という残りの7割を堪能する手段を発見した。そこから、地球を100%感じ取る生き方を覚えた。

2023年11月、パリ事務所のスタッフたちで札幌の北8西1地区第一種市街地再開発事業・ONE札幌ステーションタワーのデザイン監修の現場入りのため事務所と現場を転々としながら粛々と進めていた頃、突如ダイビング仲間から、ノルウェーのクルーズに1人行けなくなったので、代わりに行けないかという話をいただいた。翌々週の話だった。

その方には申し訳ないが、僕にとっては数年先まで埋まっていた船の空席情報という吉報。弊社は全員出社義務がないため、リモートワークを世界中で各自好きなのところで家族や仲間たちと趣味を楽しみながら、本業の建築家活動を続けている。僕自身も施主との対面と現場以外は調整が付きやすい。急ではあったが調整し切った。

11月は札幌、香港、マカオ、深圳、そしてまた札幌、東京、石垣島、小浜島。石垣島・東京でただ荷物をピックアップだけして、デンマーク・コペンハーゲン、ノルウェー・オスロを経由して、お誘いいただいたトロムソに現地集合した。そこから約2週間、ノルウェー海界隈でクベナンゲン湾を中心に圧巻のフィヨルドに囲まれ、北上し、海の上に浮かぶ移動する建築での生活が始まった。極寒の北極圏。北緯66度33分線の北側。極夜と白夜の世界。季節的にもほぼ極夜に近く、日照時間は1時間を切っていた。

常に電波が通る状態をキープしたので、仕事には支障なし。Webミーティングも通常通り難なくクリア。20年前海外に出始めた頃、どれだけネット接続に苦戦したことか。どこでも仕事ができる分、どこでも仕事を意識しないといけないデメリットもあるが、ノルウェー海の船上でもこれがデフォルトになった時代、北極圏の海の上でも通常通りの仕事が進む。

今回乗船したクルーズ船という建築は、12名のゲストの個室、共有スペースとしてリビングダイニング、甲板、サウナと露天風呂、トレーニングルームなどと、サービスサイドにキッチンや船長やシェフなど十数名の管理スペースに分かれる。北極圏の11月は日照時間が1時間もないので、船外での活動時間は日照時間前後も含めてせいぜい2時間。その間の貴重な昼間をフィヨルドに囲まれた海の上での生活を楽しみ、海の中へと潜りにいく。

ここでの主な目的は、シャチとクジラとのスイムだ。ウォッチングではなく共に泳ぐ。水中で共に泳ぐ経験ができる場所は、世界規模で見ても非常に少ない。水温は5度。気温はマイナス10度。晴れた日には朝焼けと夕焼けが延々と続き、美しいピンク色の空が広がるが、もちろん雪嵐の日もある。そんな中でシャチやクジラを探し続け、ドライスーツを身にまとい、共にスイムする。潜っている時の方が出た後よりましで、海から出るとあまりの寒さに肌が痛い。とはいえ船中は、全く問題なく薄着で過ごせる。海上でも気密性・断熱性も高い。

2023年の統計によると、住宅の気密性能基準は、世界一がデンマーク、続いてオランダ、ベルギー、そしてノルウェーと続く。その後も欧州が続き、日本は10位。

なぜわざわざノルウェーの北極圏まで来て潜るのか。北海道・知床などでもシャチはいるが、^{どうもう} 獯猛。知恵を持つシャチは、氷上でくつろぐアシカを海の下から氷を砕いて落とし、捕食する。ノルウェーのシャチは、ニシンを主食としているため、ヒトや大型哺乳類を襲わない。

大型のクルーズ船からは、積んである小型のクルーズ船をクレーンで海面に降ろし、船外階段で海面まで降りて乗り込む。オルカを発見すると、そこから海へエントリーする。オルカやホエールと共に毎日1、2時間、地球の71.132419045%の海を堪能する。



フィヨルドに囲まれた海の中で迎える朝焼けか夕焼けかわからない空



小型船に乗り込んで北極圏の海を探索する冒険



オルカとホエールが同時に現れ、共に泳ぐことができる世界的にも貴重な体験ができる奇跡的な海



船内寝室から頂くフィヨルド

船上デッキから見たオーロラ

船に戻り日が暮れるとランチタイム。Webミーティングの合間に窓の外を眺めると、微かな環境光と共に迫力あるフィヨルドが迎え入れてくれる。

そして完全に日が暮れる。これからが北極圏の楽しみ、ポーラープランジのスタート。極寒の海に水着1枚で飛び込む。皆勢いで飛び込む。オランダのデルフトで運河に飛び込んだ当時は思い出す。その後もウィーンのドナウ川、パリのセーヌ川、真冬のカップマルタン海。さまざまところで藻にまみれ飛び込んできたが、ここまでの極寒は肌が痛い。飛び込んだ後はデッキの露天風呂、サウナと極寒のデッキを行ったり来たり繰り返しながら、フィヨルドに囲まれた吹雪の中、海の上を進み続ける。何の光もない中で輝く星空、そして浮かび上がるオーロラ。暑さと寒さを絶景の中で堪能する。このポーラープランジはこのクルーズ船だけのものだけではなく、街中でも体験することができる。極寒の地の海に、そしてその横にはやはりサウナが設置されている。

サウナと言えばフィンランドのイメージが強いが、ノルウェーでもサウナは根強い人気がある。海の上でも移動しながらの景色を堪能しながらサウナに入ることができるとは思っていなかったが、日常的にサウナのある環境下であるお国柄か、違和感はなかった。



ポーラープランジ

船での生活の2週間。天空率の高い船上デッキからオーロラを垣間見る。フィヨルドに囲まれた世界で眺めるオーロラ。露天風呂やサウナに浸かりながら見上げる緑や紫のオーロラ。最高だった。

海の上を動く建築。ここに求められた最低限の機能は、地球の28%の陸が求めるものとは異なる。71%が求める海での生活スタイル。たった12人のためだけの、海上

の移動建築。

最近では北海道のプロジェクトをやっていることもあり、バックカントリーをしている。ノルウェーの北極圏に来たなら折角だからとスノーボードをやってから帰ろうと、船上での生活を終え、陸に辿り着いてから山へと向かったが、トロムソの街にはスキー場やリフトというものがない。まさかの何もない山でのバックカントリーだった。スプリットボードで山を垂直に登り、頂上で360度の北極圏のパノラマ景色を堪能する。パウダースノーの中、下界まで滑り降りる。日没と同時に登り始めたため、街灯も何もない真っ暗な暗闇をただひたすら登り、下界に広がる村の灯を目指して降りていく。

オスロに戻り、定番のオスロオペラハウス(スノヘッタ、2007)や現代美術館(レンゾ・ピアノ、2012)など、いずれも海を一体的に取り込んでいる建築を、極寒の中で散策する。オスロ中央図書館(アトリエ・オスロとルンドハゲム、2020)、ムンク美術館(ファン・ヘレロス、イエンス・リヒター、2021)などを含め、新古典主義の街並みと共に都市や建築を数日視察し、次の目的地ポーランド・ワルシャワへ向かった。

いくつか会社をやっているが、海関連の会社では、こういった自然の中で偶然遭遇する海洋哺乳類とスイムやダイビングなどで戯れる。建築設計の合間のひとときで海を満喫し、陸に戻ると建築にまた戻る。海の上の建築、海の中の建築。

海の中の泡、液体の中の気体。陸の中の滴や孔、気体の中の液体。建築を考える上で海や泡、滴や孔は切っても切り離せない。

堀内功太郎 (ほりうち こうたろう)

KOTARO HORIUCHI 株式会社

Founder, CEO, Architect

工学修士、一級建築士、PADIインストラクター、潜水士

2003年メカノー(オランダ)。2004年PPAG(オーストリア)。2005-2009年ドミニク・ペロー(フランス)。2005年~ KOTAROO ARCHITECTURE(フランス)。2009年~ KOTARO HORIUCHI ARCHITECTURE Inc.(フランス)。2015年~ KOTARO HORIUCHI(フランス)。2020年~ KOTARO HORIUCHI Corp.(東京)。

石と鉄が出会うとき

—サント=ジュヌヴィエーヴ教会—



後藤 武

鉄筋コンクリートの起源

鉄筋コンクリート建築は、なぜ生まれたのでしょうか。もちろん産業革命以後の技術進歩の中で、セメント製造に関する化学研究が進展したということも重要です。そして製鉄技術の進展とともに炭素の含有量が少ない錬鉄が精製されて引っ張り力を鉄が担うことができるようになったことも大きいでしょう。しかしそもそも、セメント製造に関する研究が進められたのはなぜなのかと考えれば、それは古代ローマ建築の材料を再現して利用したいという欲求が高まっていったからに他なりません。18世紀末に古代ローマ建築とビザンチン建築への工学技術的関心が高まったことが、鉄筋コンクリート建築を生み出したのです。それはどういうことでしょうか。

今やパリの代表的な観光名所となっているパリのパンテオン。鉄筋コンクリート建築の起源を辿るとき、この建築は格別な重要性を持って私たちの前に立ち現れてきます。1755年、パリの守護聖人サント=ジュヌヴィエーヴに献堂する教会の建築コンクールが開催され、建築家ジャック・ジェルマン・スフロが選ばれました。のちにフランス革命期の国民議会によってサント=ジュヌヴィエーヴ教会は、フランスの偉人たちを祀る墓所として利用されることが決まり、パンテオンと名づけられることになりました。サント=ジュヌヴィエーヴ教会は、ギリシャ十字型平面の上部に巨大なドームを戴き、ほぼすべて林立する柱だけで架構を支える構造になっていました。とはいえ建設途中で柱に亀裂が見つかって強度不足が指摘され、外壁の開口部が塞がれることになってしまったため、現在では柱だけの軽快な雰囲気は大分失われてしまっています。サント=ジュヌヴィエーヴ教会は柱のみによる構築が古代ギリシャ建築の理想を体現しており、18世紀末における新古典主義建築の傑作だと評されてきました。

巨大なドームを柱だけで受けること。それはスフロにとって、古代ギリシャ建築と古代ローマ建築とを統合する建築の理想でした。円柱で構成された古代ギリシャ神殿は大理石で建設されていましたが、屋根だけは大理石でスパンをとばすことができませんでした。そのため屋



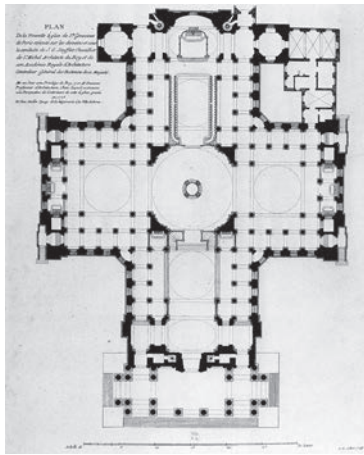
サント=ジュヌヴィエーヴ教会正面ファサード (注2)

根は木材で架構されていました。それに対して、古代ローマ人たちはドームを発明します。ヴェスビオ火山の噴火で降り積もった火山灰が雨にあたった後に硬化していることを見つけた古代ローマ人たちは、それを建築材料に利用することを思い立ちます。コンクリート建築のはじまりです。彼らは煉瓦や石を型枠に利用してコンクリートを打設し、ドームを生み出していきます。石で屋根をつくれなかったギリシャ人たちの代わりに、古代ローマ人たちは屋根をコンクリートでつくることに成功したのです。

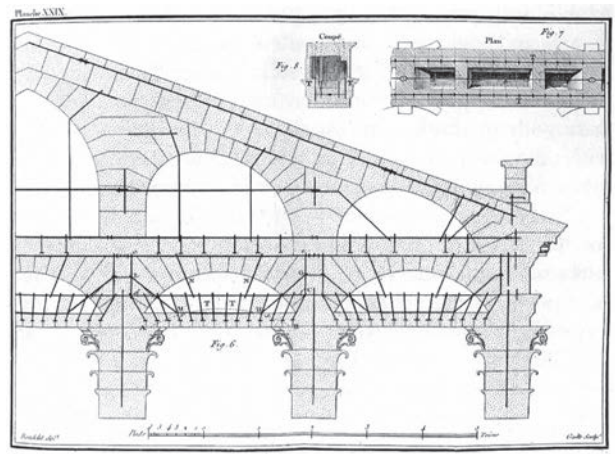
コンクリートでドームをつくと、その重さで大きな推力がかかります。推力とは、建築の外側に向けて働く力のことです。古代ローマ人たちはこの推力の処理のために、分厚いコンクリートでできた壁をつくりました。古代ローマ建築は、ドームを壁で受ける構造でした。のちになってコンスタンチノープルに住んでいたギリシャ人たちは、ドームを柱で受けることができなかと考えはじめました。そこで彼らは、大きな石や煉瓦の屑がたくさん詰まった古代ローマ建築のコンクリートの粗骨材を見直して軽量化を図り、煉瓦と軽量のセメントによってドームをつくりました。そしてそのドームを柱で受け、推力受けとして外側にお椀型の壁を設けました。ビザンチン・ペンデンティヴと呼ばれる架構形式です。



サント＝ジュヌヴィエーヴ教会断面図
Archives nationales de France,
01169443 ©CMN/ Caroline Rose



サント＝ジュヌヴィエーヴ教会平面図。ドームを支える中央四隅の三角形の柱型の上にフライング・バットレスが隠れて挿入されている。(注3)



サント＝ジュヌヴィエーヴ教会の鉄筋配筋図(注4)

新古典主義とゴシック

イタリア・ルネサンスの建築家たちも、古代ローマ建築とビザンチン建築にヒントを得て柱とドームの建築を生み出してはいました。しかしそこでも壁が多いものばかりでした。18世紀末にフランスでスフロが取り組もうとしたことは、純粋に柱だけで成立する空間でした。最終的には外壁が付加されたのでうまくいかなかったこの取り組みではありますが、内部空間だけを見ればスフロの意図は見事に発揮されて実現しています。イタリア・ルネサンスの建築家たちとスフロの決定的な違いは、スフロが中世ゴシック建築を参照していたことです。ゴシック建築は、フライング・バットレスという外側からのつかえ棒のような部材を付加することによって、巨大なヴォールト屋根の推力を受けようとしていました。スフロはエンジニアで建築家でもあったジャン＝バティスト・ロンドレのサポートを得て、サント＝ジュヌヴィエーヴ教会で、ゴシック建築のフライング・バットレスの役割を果たす部材を柱の裏側に隠して、林立する柱だけで巨大なドームを保たせようとしてしました。新古典主義という、古代ギリシャから古代ローマ、ルネサンスと何も変わりばえのしないイメージをもつ人が多いと思います。しかしスフロの新古典主義は、ビザンチン建築の再解釈とゴシック建築の構造形式の応用によって、柱だけの建築をつくり出す新しいものでした。歴史の中から新しい建築が生み出されるプロセスをここに垣間見ることができます。

石と鉄

スフロは、サント＝ジュヌヴィエーヴ教会の設計に携わるようになる以前から、古代ローマのコンクリートをフランスで再現できないか検討していました。あわよくばサント＝ジュヌヴィエーヴ教会のドーム架構をコンクリートで打設できないかと検討もしていたようです。し

かしそれは実現させることはできませんでした。スフロが1780年に死去すると、サント＝ジュヌヴィエーヴ教会の設計はロンドレに引き継がれます。ロンドレは切石組積の柱による軽快な構造を実現させるために、楣の部分に鉄筋を縦横に配筋していく方法を考え出しました。実際にサント＝ジュヌヴィエーヴ教会はコンクリートという材料を使用することはありませんでしたが、この切石組積と鉄筋との出会いは後の鉄筋コンクリート建築をはるかに予見させるものです。

ゴシック建築の構造を再解釈し、古代ローマ建築やビザンチン建築に立ち戻って新しい建築を生み出そうとしたスフロ。この考え方は、19世紀になってネオ・ゴシックと呼ばれる建築家たちを生み出していくことになりました。その中に、ヴィオレ＝ル＝デュクやその弟子のアナトール・ド・ボドーがいました。ド・ボドーは、ゴシック建築の構造を批判的に再解釈し、ビザンチン建築の構造の利点を再活用しながら、公共建築として世界最初の鉄筋コンクリート造とも言えるサン＝ジャン・ド・モンマルトル教会を設計することになりました。セメントの精製技術や鉄の溶鉱炉開発だけが、鉄筋コンクリート建築を生み出したわけではありませんでした。建築家たちが新しい建築を追い求めていく中で、古い建築に立ち戻ることによって見出されていったのが、鉄筋コンクリート建築だったのです。実際に鉄筋コンクリート建築が生まれる100年以上も前、サント＝ジュヌヴィエーヴ教会の中にその萌芽があったのです。

〈注〉

- 1: Robert Gargiani, *Concrete from archeology to invention 1700-1769*, EPFL Press, 2013, p.358.
- 2: 出典 Jean-Marie Pérouse de Montclos, *Jacques-Germain Soufflot*, Éditions du patrimoine, 2004, p.88.
- 3: 出典 Jean-Marie Pérouse de Montclos, *Jacques-Germain Soufflot*, Éditions du patrimoine, 2004, p.90.
- 4: 出典 Jean-Baptiste Rondelet, *L'art de bâtir*, vol.2, livre 3, pl.29, Avery Architectural and Fine Arts Library.

御代田の月の神



会田友朗

2007年秋、長野県の御代田町^{みよたまち}、浅間山を望む緩斜面に一棟の住宅が建った。設計中「新幹線通勤の家」と呼んだ住宅は、施主が竣工を待たず東京の会社を退職し急転直下、当地で起業するというドラマを経て完成、「はじまりの家」と命名された。移住後、施主は仕事で全国各地を飛び回りながらも、地域の休耕田の再生や都市との交流を意図した「通い稲作塾」等のプロジェクトを立ち上げた。以来、僕にとって御代田は、現場や田んぼ等、公私にわたり毎年訪れる縁深い地となって今に至る。

月の神が昇る尾根

同じ場所に通い続けることで見えてくることがある。それは、風景が身体化する、という実感だった。北に、陽光を正面から受けて堂々と座する浅間山。軽井沢から西へ流れ鋭く大地を刻む(=田切地形)湯川は、やがて千曲川へ注ぎ盆地を形成、遠く北アルプスの美しい夕焼けへ視線を誘う。南は関東山地の巒の肌理が細かい山並みが迫り、中山道の裏街道に日中も静かに濃い陰を落としている。このような風景の微妙な差異や表情、距離や方位、そして時間の変化がもたらす、言わば「場所の感覚」が、いかに繊細なものか、御代田に教えられた。

ある年の田植えの日の夕暮れ、神社境内の駐車場で
の宴会(地元の方は「俺たちは限界集落ならぬ宴会集落」と笑う)で、ふと空を仰ぎ、東側間近の尾根の背後から昇る美しい満月に息を呑んだ。この尾根こそ、当時、設計資料として眺めていた明治期の絵に記述のあった「月の神」だと気づき身震いしたのを覚えている。集落の南東に位置するこの山裾の稜線から、農繁期に月が昇り、人々の信仰対象となったのだろう。ちなみに、神社の名前は「大星神社^{やしろ}」である。集落の社と尾根が、銀河と接続して文字通り小宇宙をつくっている。

風景がつくる建築

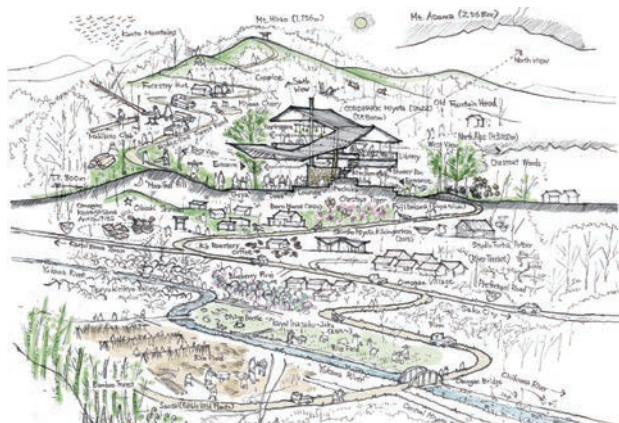
数年前、「月の神」のさらに奥、一筋隣の尾根沿いの土地を施主と訪れた。巒の奥深い山間の、そこだけばかりと南北に視線の抜けた不思議な平地であった。縄文土器も出土するエリアだ。緑の濃い夏、人工物は見えず雄大な浅間だけが切り取られていた。きっと縄文人も同じ景色を見ていたはずだ。里山の維持管理を担う、民間に

よる新しい拠点の敷地として、これ以上ふさわしい場所はないと直感した。施主と考えは一致しプロジェクトはスタート、2022年夏「コードマーク御代田」として竣工した。昨年のJIA長野建築賞・最優秀賞をはじめ、企画・運営の取り組み等含め、風土と建築の一体性について各所で評価いただき、大変光栄である。

その設計の考えをまとめ1枚の絵を描いた。建物のコンセプトに山や川や田畑が描いてあって驚いた、と感想を頂戴したが、いつの間にか山河を意識するのが作法となっていた。最近では端的に「風景がつくる建築」と説明しているが、ここでは誌面の都合上詳細は省くことにする。

この絵には建築を中心に、川沿いの田んぼや段丘、集落、月の神の尾根、平尾山を曲がりながら巡る道が描かれている。里山を維持管理するためには何より手入れをする林道が重要であり、その整備の拠点でもあるから、道を描くのは当然だった。建築中、新たな林道を地元の方々が切り拓き、建築へ至るメインのアプローチが変わるといった事態も発生した(ちなみに素晴らしい建築の導入部となった)。さらに想像を超える嬉しい驚きもある。同時期に町内に移住した若い芸術家のアトリエを設計したのだが、竣工後まもなく、彼は半ばアトリエを飛び出しチェーンソーを手に山に入り、バックホーで大地を彫刻するように日々林道をつくっている。僕が絵に描いたバックホーの操縦者は君だったんだね、と心の中で呟いた。

このようにすでに多くの変化があり、10年後の風景を想像することもできないが、この場所の未来が楽しみだ。まだまだ教わることがたくさんある。



「コードマーク御代田」のコンセプトスケッチ

設計上の瑕疵について



榎本・藤本・安藤
総合法律事務所
弁護士
安藤 亮

私の経験上、瑕疵の存否が争われた建築案件（例えば雨漏りなどが典型例）では、主に施工者が責任を問われることが多いのですが、案件によっては、施工者とともに設計者の設計上の瑕疵についても責任を問われることがあります。

例えば、私が実際に関与した案件においても、風呂の床下に水が溜まってしまふ事象について、施工者の施工瑕疵が争われるとともに、設計者についても、およそ漏水が起きないように設計する義務があった（にもかかわらずその義務に違反した）ということをも理由として、設計瑕疵の責任を問われたことがあります。

設計者に対する責任追及については、施工者への責任追及に巻き込まれるという側面もあるように思うので、トラブルを未然に防ぐためにも、今回は、いかなる場合に設計瑕疵の責任を問われるのかを検討していきます。

設計瑕疵の責任を問われる場合

ある瑕疵現象が、施工ではなく設計に起因する場合としては、設計図書の指示どおりに施工された結果として瑕疵現象が発生した場合（作為形態）のほか、設計者が瑕疵現象の発生を防止するために必要な検討を怠り、施工者に適切な指示を与えなかった場合（不作為形態）も含まれる、とされています。

また、雨漏りや漏水について争われた場合、①軒の出が少ない設計をしたために吹降りの雨水が屋根との取り付け部分から浸入した場合、②設計図書で指示された開口部分下部の立上り高さが低かったために大雨の際にバルコニーに溜まった雨水が室内に浸入した場合、③嵌め殺しの窓にサッシを使用せずガラスを躯体に直接嵌めたくて周囲をシーリングする設計をしたところシーリングの劣化等により漏水が発生した場合、④雨水に晒されるバルコニーにつき排水口に向けた水勾配の程度や取り方を指示しなかったために十分な水勾配がとられず、雨水排水が滞って漏水が発生した場合などは、設計上の問題から瑕疵現象が発生しているといえるだろう、とされています。（小久保孝雄・徳岡由美子編著『建築訴訟』青林書院、350頁）

裁判で争われた例

続いて、設計の責任を問われた裁判例（あるビルの1階店舗スペースの区分所有者（原告）が、店舗の上階の部屋の内装工事の設計ないし施工の不備等により、店舗部から断続的に漏水および悪臭が発生しているとして、設計・施工者等を提訴した事案）をご紹介します。

設計に関する内容として、原告は、自分の所有する1階店舗の床下にある汚水槽の点検口からの悪臭が発生するようになったところ、これは、床下に汚水槽を設置したこと自体に問題がある、あるいは、地下の汚水槽と上階店舗の部屋のトイレとをつなぐ排水勾配が不十分であったため、排水溝の臭気が逆流したものであると主張しました。これに対し、設計・施工者は、①トイレ配管の勾配や径の大きさをトイレ1か所のみを前提に設計しており、その後のトイレの増設により悪臭が発生するようになってもそれは自分の責任ではない、②汚水槽を地下に設置したことは何ら問題ではない、などと反論しました。これに対し、裁判所は、結論として、床下に汚水槽を設置すること自体が設計上一般に許されていないなどといった事情を認めることはできない、また、本件において、配管勾配の不足が原因で悪臭が発生していると認める証拠もない、かえって、原告が点検口にゴムパッキンを設置して以降、同所から悪臭が発生していないこと等の事情に鑑みれば、施工後の汚水槽の点検口の整備不良や、上記誤接続後の清掃不十分等が原因で同所付近から悪臭が発生した可能性が高い、と判断し、設計に問題はないとしました。

上記の裁判例では、結論として設計の責任は否定されましたが、悪臭という事象（結果）が生じたことにより、設計者が紛争に巻き込まれてしまったことはご理解いただけるかと思います。

このようなトラブルを避けるためにも、建築基準法や各種技術基準に反する点がないから良しとするのではなく、さらに雨漏りや水漏れ、悪臭などの発生をより防ぎやすくするための設計上の工夫はないか、一歩立ち止まって設計の検討をしていただくと良いでしょう。

修業時代のこと



よしのひろ
広谷純弘

私の学生時代は磯崎新さんが記号論や言語学を用いてロジカルな建築をどんどん発表していて、同時に安藤忠雄さんや伊東豊雄さんたちが小さいけれど新しい建築をつくり、建築は建築家の価値観に基づき、自立した存在として展開されていたと思います。そのような中で、『新建築』で見た「佐渡国小木民俗博物館収蔵庫」という小さな建築が自分の記憶の中で忘れがたい存在となりました。鉄筋コンクリート造の平屋建ての建築は切妻屋根を能登瓦で葺いていて、地域の建築と同じ素材でつくられているのが当時としてはとても新鮮でした。それでいて外壁の妻面が壁勝ちになっていて、日本の建築ではないような不思議な印象を感じたのです。それは、ずっと取れない棘のような違和感でした。つまりとても気になるのだけれど、何が魅力なのか理解できなかったのです。それでJIAのオープンデスク制度を利用して、設計者の戸尾任宏さんの事務所・建築研究所アーキヴィジョンに3週間ほどお世話になり、それが縁で就職することになりました。

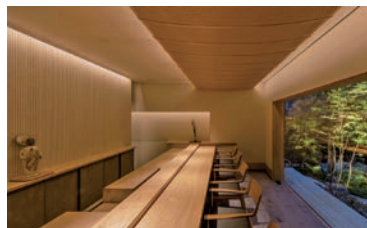
事務所では昼食とおやつの時間に戸尾さんから聞く話が楽しみでした。「西澤(文隆)さんと桂離宮に行った時、西澤さんが池の水深を測っていた。何度も桂を見ているだろうに今更なぜと思ったが、何度も見ているからこそ水深を測ったのだと気づいた」という話が印象に残っています。西澤さんは頭の中に季節の違いがわかるほどに桂の空間を構築しているのだらうと思いました。戸尾さんは独特の色づかいをしましたが、僕らに示す時には古い絵本から選んでいました。既成のものをあまり信じていないのか、自分の尺度があるように僕は感じていました。それは先ほどの西澤さんの話とも共通する印象です。

横瀬村立資料館のエントランスホールの照明器具を担当しているときに、ステンレスチューブを空間に浮かせて、上下に照明をつけるというアイデアを出したら、銀座の大井工場(吉村順三さんの暖炉や金物をつくっていました)に3日ほど通うことになりました。そこでどのようにつくるかを学んで来いというわけです。工場では金物の制作過程のチェックをする社長にくっついて過ごしました。それはとても良い経験でした。アルミでつく

るのか、ステンレスでつくるのか、無垢が良いかパイプが良いか。材料と仕上げを肌で感じることができました。

その後、寺の仏具をデザインするときに、戸尾さんはジョージ・ジェンセンのカフスを外して、「これを形を変えて拡大しよう」とか、ソファの写真を持ってきて「これをひっくり返して縮小して照明にしよう」とか言われて面食らったこともありましたが、デザインのきっかけはいろんなところにある、照明器具をデザインするときに他の照明器具を参考にするなという教えと考えました。樹木を選ぶ時も必ず苗場に足を運び、枝振りを確認していました。ある時ヤマボウシを見に行くと素晴らしい紅葉があり、交換してもらいました。植える場所には大きすぎると思いましたが、植栽の際にかなりの枝を払いながらも、見事に空間に収まりました。戸尾さんにはその塩梅が予想できていたのだと思います。とにかく自分の設計した空間を想像の中で歩けるようにスケール感とシークエンスを押さえることと、同時に現場主義が大切だと言葉の外で教えてくれたと思います。

今でもその教えは身から離れることはなく、学生たちには自分の考えた空間を歩けるようになれと言い、職人を訪ねて工房で打ち合わせをします。先日も別府に竹細工の工房を訪ねました。建築家の考えだけではうまく収まらない世界がそこにあることを実感し、職人と共に考える貴重な時間です。そして、そこには今回は使わなくても、将来のデザインの発想のヒントがたくさん転がっているのです。



上：竹細工の工房にて
左：竹編みの天井

何者でもなく

青柳 創

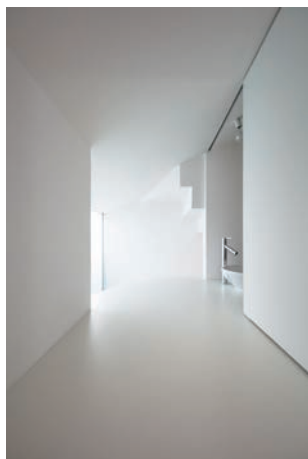


2006年より18年間、日建設計で設計活動をしてきましたが、常に設計の素人です。と言うのも、担当するプロジェクトのビルディングタイプが都度異なるため、毎度一から勉強の繰り返しだからです。ビル、学校、商業、空港、美術館、研究所など実現に至らないプロジェクトも含めれば多岐にわたり、慣れてきた頃にはまた次の初めまして、です。建物規模においても、最小は約700㎡の戸建て住宅「On the water」から高さ350mの木造超高層構想「W350 計画」に至るまで実にさまざまで眩暈がしそうですが、素人ながらも大きいものにも小さいものにも、ある程度は対応できる気軽さが自身の持ち味なのかもしれないと、ふと考えたりします。

そう言えば、4年ほど前にアトリエを主宰する妻と共同で設計した自邸「善福寺の家」が建ち、現在もそこに暮らしています。「On the water」はセカンドハウスでしたので、常に住まうという意味での戸建て住宅は初めてのビルディングタイプであり、約90㎡は最小規模の記録を大きく更新しました。組織で会得した徹底的にロジカルな設計アプローチに加え、自邸の設計を通して恥じらいもなく情念を希求するような設計アプローチにも手を出すようになり、ますます收拾がつかなくなっています。しかし、さまざまな領域を横断する何者でもない設計人生こそが、非常識な発想を生む原動力と信じ、常に挑戦を続ける素人でありたいと思います。



On the water
(撮影：藤井浩司/ナカサアンドパートナーズ)



善福寺の家 (撮影：太田拓実)

JIA mean to you

伊藤友紀



初めてJIAを訪れたのは2008年、修士2年の秋であった。アルカジア釜山大会学生ジャンボリーから帰国し、報告書をしたためて神宮前の本部を訪問した。森田嘉久専務と事務局の宮下けいこさんに報告を読み上げた時は大変緊張した。その後、建築家とJIAの未来像について、国際委員長でいらした国広ジョージさんと森田専務が2時間近く講義してくださった。一介の学生になんて熱心にお話しして下さるのだろうと驚き、感激した。帰り道、森田専務が「君たち学生にとってJIAはどんな存在？」と質問された。「雲の上の存在といった感じで、よくわかりません」と答えると「それも悪くないね!」とニコニコされた。

2018年に米国研修から戻り、アルカジア東京・上海大会の学生ジャンボリー講師を担当したご縁で、2022年より国際委員を務めている。国際委員会の活動は多岐に渡り、JIA建築家大会では、毎年IPF (International Presidents' Forum) を主催、海外の建築家協会会長を招聘しカンファレンスを行っている。JIAが加盟する国際機関のUIA・アルカジアへ必要委員の派遣や、さまざまな協力要請への対応、日本の建築家がアワード/コンペに応募する際には橋渡し役としてサポートも行う。ウェビナーやWSも開催し、日々学ぶことばかりである。昨年、韓国の3大学から街歩きWSの依頼を受け、渋谷地域会と共催して好評を博した。今年度上半期は、香港、ドイツ、カルフォルニアの大学から依頼を受け、3度開催した。日本の建築学生も参加し、若い世代へ国際交流の輪が広がっている。

JIAと出会い16年、入会7年目、国際委員は3年目に入る。もし、今一度「君にとってJIAはどんな存在？」と尋ねられたら何と答えよう。素晴らしい方々に囲まれて、日々教えられ、助けられ、楽しく学ばせていただけていることを、とても幸運に思う。今後もJIAの一員として、日本と海外の建築家と学生たちが、建築の喜びを分かち合うお手伝いができるよう、精一杯努めていきたい。



街歩きイベント集合写真
(JIA建築家クラブにて)
国際委員会・渋谷地域会
が引率し、日本の学生も
参加。

交流委員会 Bグループ

交流イベントを積極的に企画

—代表幹事に就任して—



交流委員会
Bグループ代表幹事
日新工業
西谷大介

私たち交流委員会Bグループは、防水材メーカー・塗料メーカーで構成されており、コロナ禍でも各社協力しながらオンラインセミナーや建物見学会等を企画・実施してきました。毎月の定例会ではオンラインツールを併用し、対面・非対面のハイブリッド形式にて会議を実施しています。

土を船で運搬し溶岩の上に砂を盛り、手作業にてコースは造成された。

大島コースの特徴は、自然をそのまま使用したコースレイアウトと、当時の川奈ホテル社長が懇親のあった方々と相談して決めたといわれている各ホールそれぞれに付けられたニックネーム。そのメンバーは設計者の大谷光明をはじめ、第52・53・54代内閣総理大臣になる鳩山一郎や当時の国会議員など、多くの著名人により命名された。

(The Kawana Story特設サイトより抜粋)

2023年度の活動内容

2023年度は8月に歴史的建造物である清澄白河庭園「涼亭」で納涼会を開催。12月には国土交通省大臣官庁官庁官舎部計画課 松本企画専門官に講師をお願いし、Webセミナー「営繕分野におけるインフラ長寿命化の取組」を熱海でのサロン会議として実施。翌日には川奈ゴルフコース大島コースでゴルフコンペを行いました。また2024年3月にはBグループ主催のセミナーを開催しました。

今後の予定

昨年コロナが「5類感染症」となりましたので、今年度はさらに活発に活動をする予定です。7月30日(火)には昨年同様、清澄白河庭園「涼亭」で納涼会を行い、Bグループの皆様と穏やかで楽しいひと時を過ごすことができました。蒸し暑かったせいも、ビールがより美味しく感じました。9月6日(金)、7日(土)にはバルビュー南熱海でサロン会議、川奈ゴルフコース大島コースでゴルフコンペを企画しています。また、12月3日(火)には建物見学会を開催予定です。

〈開催場所の紹介〉

●清澄白河庭園「涼亭」

池に突き出るようにして建てられた数寄屋造りの建物。1909(明治42)年に国賓として来日した英国のキッチナー元帥を迎えるために岩崎家が建てたもの。震災や戦災をまぬがれ今日に至ったが、1985(昭和60)年に全面改築工事を行い、現在は集会施設として利用できる。2005(平成17)年、「東京都選定歴史的建造物」に指定。(東京財団法人東京都公園協会サイトより)

●川奈ゴルフコース大島コース

1928(昭和3)年に開場し、現存しているゴルフ場では12番目に古いゴルフ場。大島コースを設計したのは、「日本のゴルフの父」と称される著名なコース設計家 大谷光明。昭和初期に重機はなく、伊東から

2024年度よりBグループの代表幹事に就任し、早3ヵ月が経ちます。イベントを企画していく中で、実現させるためには多くの方のお力添えがあっこそなのだ実感する毎日です。Bグループの皆様には今一度、深く御礼申し上げます。

今後もアイデアを出し合いながら、活発に活動をしていきたいと思いますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



清澄白河庭園「涼亭」(出典: photoAC)



川奈ゴルフコース「大島コース」

交流委員会 Cグループ

建物見学会

—北九州の産業遺構を訪ねる—



交流委員会
Cグループ
日本製鉄
知見徹摩

北九州は日本の産業に革新を与えた地

1901(明治34)年に官営製鉄所として操業を開始した、日本製鉄九州製鉄所八幡地区の見学会を開催しました。製鉄所とほぼ時を同じくし、1917年に東洋陶器株式会社(現TOTO(株))も北九州市で設立。西洋の技術を導入し、日本で花を咲かせた挑戦の足跡を辿りました。

製鉄所見学

日本製鉄九州製鉄所八幡地区にて、戸畑第4高炉^{こうろ}～熱延工場と、官営八幡製鐵所旧日本事務所の見学を実施しました。所内見学会の後に、製鉄所で大量に使用する水を確保するために建設された、河内貯水池を見学する機会もいただきました。

高炉は製鉄所の主要な設備で、原料の鉄鉱石と石炭(コークス)を入れ、熱風を吹き込み、鉄鉱石を還元・溶解させ鉄を取り出します。大型のものは高さ100mを超え製鉄所のシンボリック的存在となっており、大迫力の現場を間近で見ることができました。熱延ラインは、長方形のスラブと呼ばれる鉄の塊をおよそ1,200度まで加熱し、コイル状になるまで薄く引き伸ばしていく工程です。

見学当日はメンテナンス中であったためビデオ視聴の後に休止中のラインを歩いて見学しました。旧日本事務所(後述)を経て見学した河内貯水池に架かる「南河内橋」は、2006年に国の重要文化財(建造物)に指定されています。日本に唯一現存するレンティキュラー・トラス(レンズ型トラス)と呼ばれる建築様式でつくられた鋼橋です。

製鉄所発祥の地に建つ世界遺産

旧日本事務所(世界文化遺産)は、“鉄は国家なり”の指令室として1899年に竣工し、1922年まで事務所として



日本製鉄九州製鉄所八幡地区を見学

使用され、その後は鉄鋼研究所等1960年代後半まで活躍した建物です。当時としてはモダンな建築物で、構造は赤レンガ組みの2階建、左右対称のデザインで中央にはドームがあり、天井の梁は洋小屋組構造でクイーンポストトラス型を採用、屋根は和瓦葺、外壁の赤レンガはイギリス式のレンガ積みとなっています。

2014年3月の耐震補強工事の後、2018年から2020年9月に内装復元工事を行い、内部は当時の様子を忠実に再現しています。資料として残っている約5,300枚のガラス乾板はデジタル化すると数億画素になるそうで、実物をよく見ると高炉建設に携わった人々の顔形がくっきりと見て取れるほどです。

TOTOミュージアム

設計は梓設計、建築は鹿島建設で、2015年に竣工したS造H型钢三次元曲面仕上げの建造物。外装はダブルスキnlーフの衛生陶器を思わせる白い曲面建築です。北九州の地で、陶製腰掛水洗便器を開発し、それを普及させ生活文化の向上や社会の発展に繋げることを目指した東洋陶器株式会社(現TOTO(株))の歴史が紹介されています。衛生陶器の需要がゼロに近い当時、新規開拓を続ける一方、衛生陶器に必須な水栓金具の自製化も実現した挑戦の歴史は見学者に訴えるものがありました。

料亭「金鍋」での懇親会

製鉄所見学会の後の懇親会は、120年の歴史を持つ料亭「金鍋」で実施し、飛び入り参加者も加え賑やかな会となりました。黒漆喰の重厚な外観が印象的な料亭は、2004(平成16)年に国の登録有形文化財となっています。



世界文化遺産「官営八幡製鐵所 旧日本事務所」の前で

第3回まち歩き 「東京サイハッケン」を開催！

—世田谷に触れる—



学生の会 @joint
東京電機大学大学院
未来科学研究科
建築学専攻 修士2年
林 萌絵

学生の会@jointでは、6月30日(日)に新会員の歓迎会を兼ねたまち歩きイベント「東京サイハッケン」を実施。今回は、東京・世田谷エリアの建築やまちの魅力に触れながら散策した。

世田谷区立世田谷美術館

公園緑地の自然の中に開放された本施設は、タイルと正三角形のトラス状の柱を全体の共通モチーフとして多用した設計が特徴的であり、ところどころから差し込む優しい光がさらに魅力を引き出していた。企画展「民藝 MINGEI—美は美しさのなかにある」では、親しみを感じる民藝の品々が「衣・食・住」のテーマに沿って展示されていたほか、今もなお受け継がれている職人たちの手仕事も紹介されていた。「美」とはなにか、そして現代のライフスタイルにおける「民藝」にまで視野を広げた展示には目を惹かれた。

M2 (現・東京メモリードホール)

隈研吾氏の設計によって1991年に建てられた建物。中央に構える巨大な柱は、ギリシャの3大「柱頭装飾」のイオニア式を用いており、その外観は圧倒的存在感があり目を奪われた。現在の隈研吾氏の作風と異なるものの、主軸は変わらずにある作品を振り返るのも面白い。



世田谷区立世田谷美術館



東京ジャーミイ・トルコ文化センターの
礼拝堂

東京ジャーミイ・トルコ文化センター

日本で最大級の礼拝堂を持つモスクの見学ツアーにも参加し、普段触れることの少ないトルコの文化や宗教建築の魅力を知る良い機会となった。礼拝堂の中にも入ることができ、天井が高く屋根を支える柱のない開放的な空間には思わず息を呑んだ。

目的地までの道中で繰り広げられるメンバー1人ひとりの設計や建築に対する想いを共有し合う時間は、私自身とても刺激を受けた。まだまだ東京には私たちの知らない魅力が詰まった場所があるだろう。次はどのような建築、そしてまちを皆で訪れることができるのか、今から楽しみだ。

次世代のタマゴたち

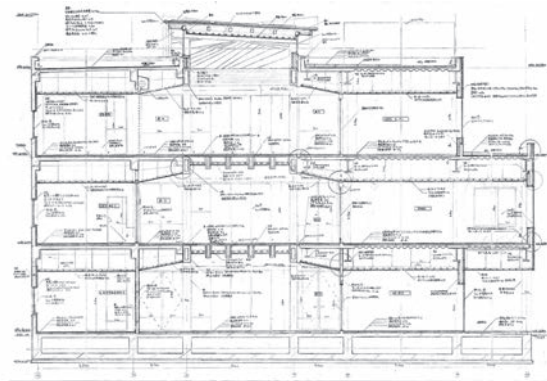


人の「心理量」を設計に活かす

学生の会 @joint 辻本雄一郎
早稲田大学創造理工学部建築学科4年

私は本年度から、田辺新一研究室で建築環境学を専攻しています。意匠設計に興味があるのですが、設計課題に取り組む中で環境の専門知識を用いて設計を行いたいと考えようになり、大学で環境の研究をした後に意匠設計の仕事に携わりたいと思うようになりました。現在は、「温かい/冷たい」「快/不快」といった人の心理量を気温などの環境条件から定量的に予測する研究を行っています。生理学に近い分野であり、建築とあまり関係ないと思うかもしれませんが、しかし、空調計画やパッシブデザインの検討など、多くの建築プロセスにおいて心理量は考慮されています。

従来の建築空間では「不快と感じる人が少ない均質な環境」が求められてきたのですが、近年は温度むらを肯定的に捉え、個人が温熱環境を選択するという考え方が広まっています。その中で、私は自己効力感という概念が重要で



設計課題で描いた矩計図

あると考えています。自己効力感とは「自分ならできる」という感覚に近く、環境分野では窓の開閉などにより自分が環境を変えられるという状態の認知と許容できる環境条件に関係があることがわかっています。つまり、自ら環境を調整可能な状態では快適と感じる範囲が広がるということです。この感覚は、自分が空間をカスタマイズすることで愛着が湧く、人々が使い込むことで公共空間が育つといった感覚に近いと思います。環境だけではなく、都市や建築を考える上で自己効力感という概念はヒントになるのではないのでしょうか。

支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は、2025年度以降「メール等の電磁的方法」で行います

これまで、支部役員選出時の広報や選挙、支部総会の招集は、文書での郵送・発送のみを認めていました。発送を依頼していたヤマト運輸が日本郵政と業務提携した影響により、ヤマトダイレクトメール便のサービスが令和6年1月をもって終了し、代替のサービスでは選挙公報が信書と判断され、今まで行っていたように『JIA MAGAZINE』に同梱することが不可となりました。よって、選挙公報は単独での「郵送」となり、関東甲信越支部の正会員全てに「郵送」する手間と費用(選挙1回あたり約30万円)がかかります。これら費用と手間の削減のため、「郵送」のみではなく、「SNSやメール等の電磁的方法」を活用することを2024年度支部総会で議案とし、承認されました。

2024年度は文書での「郵送」に加えて、「メール等の電磁的方法」で発信します。2025年度以降は、基本的に「メール等での電磁的方法」のみに移行しますので、ご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。

なお、会員の皆様に電子メールが確実に届くよう、電子メールアドレスの変更は必ず事務局までご連絡いただきますようご協力をお願いいたします。

2024年度総会議案書より抜粋

I. 支部役員選出規約改正の件

公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部役員選出規約

項目・条	公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部役員選出規約
第1章 総則 (選挙の方法) 第3条	選挙とは、第4条に定める立候補者を正会員の直接投票によって選ぶ制度を言う。 2. 前項の投票は、選挙人無記名による通信封(削除)郵送又は電磁的方法によるもの(追加)とする。 3. 立候補者が定数と同数又は定数に満たないときは、全員選出されたものとする。 4. 前項の立候補者が定数に満たないときの取り扱いについては、選挙管理委員会で定める。
第3章 役員選挙 (広報) 第7条	選挙の広報は、支部正会員に対して、支部会報等掲載又は電磁的方法(追加)によって次のような順序で行われる。 第1回 選挙の告示、第8条に定める立候補の届け出に関する事、選挙管理委員会に関する事(細則含む)の発表。 第2回 立候補者の抱負並びに推薦理由を掲載した立候補者名簿、投票開始日、投票終了日及び投票に関する注意書、投票用紙を封して(削除)郵送又は電磁的方法とし(追加)支部正会員に配布又は配信。(追加)

II. 支部規約改定の件

公益社団法人日本建築家協会関東甲信越支部規約

項目・条	関東甲信越支部規約
	略
(支部総会) 第9条	この支部の通常支部総会は、毎年1回、事業年度終了後2ヶ月以内に支部長が招集する。 2. 支部総会の招集は、少なくとも開催日の7日前までに、その会議の日時、場所、及び付議する事項を示し、文書又は電磁的方法(追加)でこれを正会員及び準会員のうち専門会員、シニア会員に通知しなければならない。 3以降略

編集を終えて&今年の夏の行事

- 小さな庭のある新居での生活を開始。まだまだ暑いですが、ガーデニングで涼を考えようかな。(小倉)
- 秋号は担当委員が特集をまとめるという試みの第一弾。読み応えのある多様な記事が揃いました。佐久間さんお疲れさまでした!(関本)
- 晩夏、めぐりの森に訪れる機会を、叔母がさいごにつくってくれました。(大塚)
- 新事務所キッチンを広めにつくったので、キッチン用品を揃えておいしいものを作りたいです。(小山)
- あまりにも暑い夏、蓄熱冷房が我が家にあることをパリの選手村の冷房システムで思い出し、10年ぶりに動かしたら、価値のあることに気がつきました。(中澤)
- 交流委員会メンバーと訪れた北九州は近代工業都市としての発展のみならず、著名な文学者を輩出する文芸土壌でもありました。(知見)

編集後記

- 今年の夏はJIAの全国支部長会議に理事として初参加。徳島の阿波踊りを踊ってきました。狂喜乱舞の四国の夏を満喫しました。(田口)
- わが家の暑さ対策。日除けにすだれを吊り下げます。(竹内)
- 中原さんに「ミュージアムデザイナー」と名付けたのは、私だったかと(笑)。(渡辺)
- 自宅のポリカの庇は明るいもので…。この夏はTEJIN遮熱レースカーテンに替えて、遮熱効果率33%を体感しています。(永峰)
- 特集では多様な執筆者の方々それぞれの哲学を披露していただき、感銘を受けました。(佐久間)
- パートナーズアイにここ最近では参加するようにしているので、カタログからは読み取れない開発の背景を聞けるのは楽しい。(望月)

あ
と
が
き

編集 : 公益社団法人日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 田口知子
副委員長 : 関本竜太
委員 : 望月厚司・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小山光・永峰麻衣子・渡辺猛
編集長 : 関本竜太
副編集長 : 佐久間達也・小倉直幸
編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・野村月咲・伊藤綾香・知見徹摩・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 301 2024 秋号
発行日 : 令和6年9月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 コラボ
■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・(公社)日本建築家協会(JIA) <https://www.jia.or.jp/>
・JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人日本建築家協会 関東甲信越支部 2024

次の世代につなげる持続可能な未来

※解体系廃石膏ボードが石膏ボードに戻る割合
廃石膏ボードのリサイクル率はわずか6%※



リサイクル石膏を100%原料に使用した「チヨダサーキュラーせっこうボード」を開発

廃石膏ボード 100%、製造時のカーボンニュートラル
チヨダサーキュラーせっこうボード



チヨダウーテは、廃石膏ボードリサイクル事業を通じて、廃石膏ボードを収集し、再資源化することで、日本国内の廃石膏ボードに起因する産業廃棄物の削減と、サーキュラーエコノミーの実現に貢献します。

9 産業と技術革新の基盤をつくろう	11 住み続けられるまちづくりを	12 つくる責任 つかう責任	13 気候変動に具体的な対策を
-------------------	------------------	----------------	-----------------

取得済み環境ラベル



エコマーク認定番号
22 123 004



チヨダウーテ

お問い合わせ
カタログ請求

チヨダウーテ株式会社 〒111-8520 東京都台東区寿3丁目14番11号 蔵前チヨダビル7階
<https://www.chiyoda-ute.co.jp/visionzero/circular/>

☎ 03-6635-1652

🔍 チヨダサーキュラーボード

